



徳島大学渭水会々報

第45号

発行／徳島大学渭水会
徳島大学総合科学部同窓会

題字：田中 双鶴 氏



「赤い星」

松川 寛 氏

シルクロードの西の端の町（タシクルカン）標高3000mの辺境の夜空には、人工の光もスモッグもない澄み切った星がちりばめられていた。子供のころトウモロコシをかじりながら庭先の縁台に寝ころんで見た同じ星空であった。

関連記事→P24

2016 年 10 月発行

目次

会長ご挨拶	急速に変化する時代の中で	渭水会会長 石井 博	3
学部長ご挨拶	新・総合科学部の船出	総合科学部長 平井 松午	4
総合科学部では今 (27)	グローバル社会の中で豊かに生きられる人を育てたい	総合科学部副学部長 佐久間 亮	5
Topics	児童文学作家 くすのき しげのり氏講演会		
	講演会のお知らせ		6
	今、作家として思うこと	児童文学作家 くすのき しげのり	7
特集	文部省唱歌を編纂した徳島師範学校出身の南 能衛	佐藤 義忠	8
連載③	私の職場 My Workplace		
	日本の、そして徳島の良いものを和菓子に	西川 陽子	12
進路通信	(3) 昨今の大学就活状況	就職委員長 石田 基広	14
連載⑦	感動が人間を育てる《完結編》		
	読書と人生	大学院総合科学研究部(教養教育院)教授 石川 榮作	15
研究最前線④	ヘイトスピーチの背景を探る—在特会調査から		
		大学院総合科学研究部准教授 樋口 直人	16
追悼	元 渭水会会長「井内孝幸先生」を偲ぶ	徳島県文化振興財団理事長 佐藤 勉	17
輝く新星②	～第2回渭水会会長賞～		18
	●学び続けること	角谷 健太	
	●大学生生活を振り返って	富永 美咲	
	●姉妹都市提携、多くの人に支えられてここまでくることができました	中川 雅貴	
総科のおたから	〔其ノ四〕 仙龍寺天井画	桑原 恵	23
	—原風景—	松川 寛	24
	直方谷尾美術館学芸員として	直方谷尾美術館学芸員 中込 潤	26
	地域における子ども支援 公民館における算数教室	新開 英毅	28
	阿波九城の成立と終焉をめぐる	宇山 孝人	29
連載⑦	Let's sports!		30
	●徳島大学女子ラクロス部の活動について	杉野 里於	
	●Sport Policy for Japan 2015大会 (Special Column)	豊田 真実	
エッセイ			33
	●卒業からその後	長岡さやか	
	●歌と共に	山本 鈴子	
	●草創期の恩師を偲んで	山田 秀雄	
スタートライン			37
	●今しかできないこと	林 俊輝	
	●目標に向けて	中島 真希	
	●新たなスタートライン	峪口有香子	
助成事業			40
	●徳島市退職校長会 講演会・祝賀会	三牧千鶴子	
	●徳島大学地学教室研修会・同窓会	山口 由子	
	●渭水会 教育課題研究会	奥村 兆男	
総科ニュース			43
徳大ニュース			45
編集後記			46



渭水会会長
いし い ひろし
石井 博

急速に変化する時代の中で

「徳島大学渭水会」会員の皆様方におかれましては、日頃より本会発展のためにご支援ご協力を頂き誠に有り難うございます。心より感謝申し上げます。

さて、近年、急速な情報化、グローバル化の進展に伴い、個人の価値観も多様化しており、社会環境は大きく変化しております。

今後、人工知能の技術開発により「雇用者の47%の仕事が自動化される」との英オックスフォード大学オズボーン准教授の予測もあるなど、驚くようなスピードで変わってきています。

また、今日、日本は世界一の長寿国になりました。一方、少子化の現状の中で、少子高齢化社会が急速に進んでいます、

先日、税に関する小冊子を読んでいますと、1990年には、働き手5人で1人のお年寄りを支えていましたが、2010年には、約3人で1人、更に2020年には、約2人で1人のお年寄りを支えるようになると予想されています。

今後、医療や年金などの社会保障に多額のお金が必要となります。

こうした状況の中、大学への交付金も全国的に厳しくなっているとの情報もあります。さて、徳島大学は、今後、どのような方向に進んでいくのでしょうか。

徳島大学の広報誌「とくと〜く2016夏号」の中で、野地澄晴学長が、「徳島大学はどのように発展するのか」と題して、今後の方向性を次のように示されています。

「徳島大学は、国立大学の改革加速期間において、大改革をスタートし、第三期（平成28年度から6年間）の中期目標・中期計画の方向性が確立されました。

（中略）文部科学省の重点支援の枠組みによる類型において、主として、人材育成や地域課題を解決する取組などを通じて地域に貢献する取組とともに、専門分野の特性に配慮しつつ、強み・特色のある分野で世界ないし全国的な教育研究を推進する取組を選択しました。地方貢献を通じて、本学の存在価値をさらに高めていくと同時に、本学の強みとする分野では、教育・研究の成果をさらに高め、世界や全国の大学をリードしていくことが重要だと考えています。」

このように学長が明確な方向性を示されておりますので、今後の徳島大学の取組を注視しながら、渭水会としての活動を進めて参りたいと考えております。

渭水会の会則の中で、第二条に「本会は、（中略）母校の発展に寄与することを目的とする。」とあります。今後、母校の発展のために、渭水会として具体的に何ができるかを模索していく時期に来ていますので、会員の皆様方のご支援ご協力をよろしくお願いいたします。

さて、本年度もアスティとくしまでの入学式の後、場所を総合科学部に移し、常三島けやきホールで新入生へのオリエンテーションが行われました。その中で、私の方から同窓会組織渭水会の歴史や活動内容等の紹介をさせていただきました。

新入生のこれからの研鑽、徳島大学総合科学部の発展と渭水会会員の皆様の今後益々のご活躍を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

（昭和49年 教育学部中学校課程保健体育科卒）



総合科学部長
ひらい しょうご
平井 松午

新・総合科学部の船出

昨年の渭水会報第44号でご報告しましたように、本年（平成28年）4月に総合科学部は改組し、これまでの文理3学科（学生定員265名）を文系中心の1学科（社会総合科学科／学生定員170名）に再編いたしました。新学部への設置は、徳島大学では総合科学部以来30年ぶりで、徳島大学は6学部体制となります。

ただし、平成27年度入学生が卒業する平成30年度までは、旧課程となる3学科の教育体制は維持し、これまで通り理系の先生方も総合科学部の授業を担当されます。当面、研究室・実験室などもこれまで通り変わりありません。

それゆえ、外見上は大きな変化はみられませんが、入学してきた学生の質は変わってきました。総合科学部では平成23年度以降、新入生を対象にB社の「大学生基礎力調査」を実施し、基礎学力・社会適性力の把握に努めてきています。今年入学した学生の特徴として、英語運用能力が高まった反面、計数処理などの判断推理能力がやや低下しました。文系学部になり、英語重視型や3教科型の推薦入試を導入した結果ともいえます。

同調査のアンケートの中で、「身につけたい英語のレベル」について「英語圏の大学・大学院への留学や、英語を使って仕事する際に支障がないレベル」と答えた新入生が24.7%を数えました。平成27年度入学生までは10%前後の回答率でしたので、語学力を活かして社会で活躍したいという学生がかなり増えています。「入学してよかったか」という質問に対しても、95%もの新入生が肯定的に回答しています。新学部では、こうした新入生の期待に応えられるだけのカリキュラムを用意していますが、卒業時に「総合科学部で学んでよかった」という回答が得られるよう、私どもも努めていかねばなりません。

組織改革のみならず、大学教育のあり方についても、授業改善のためのFD（ファカルティ・ディベロップメント）の実施や能動的学習を促すアクティブ・ラーニングの導入、アセスメント・テスト、ルーブ

リック、ティーチング・ポートフォリオetc.、多様な教育手法の実践が求められています。その背景には、大学教育のグローバル化や大学進学率の上昇に伴う教育の質保証、そしてICTやSNSなどの普及に伴う情報化社会の進展があります。私も含めて、「大学って自分で勉強するところ」と思っている卒業生の方々にとって、今の大学の姿は想像しがたいかもしれません。それらの要請にも応えつつ、新・総合科学部の教育目標である「グローバル化する現代社会の諸問題や地域課題を的確に理解し、問題解決に対応し得る実践的な人材の養成」、すなわち有為な地域人材・グローバル人材の養成に努めていきたいと思っています。

最後に私事で恐縮ですが、平成25年4月より総合科学部長を務めてまいり、本年度が最後の任期となります。この間、思いもかけない学部改組に遭遇し、この2年間はその対応に追われてきました。結果として、学芸学部・教育学部を引き継ぐ総合科学部の教育理念・体制を見直さざるを得なかったことは誠に残念ですが、理系色が強まった徳島大学において総合科学部の存在感・必要性は社会的にもさらに高まるものと信じています。

この間、平成26年10月の鎌田邦宏会員制作「水の調べ」の寄贈、渭水会会長賞の創設など、佐藤 勉 前会長、石井 博 会長、毛利久康 理事長をはじめ渭水会理事・会員の皆様には大変お世話になりました。第3期中期目標期間（平成28～32年度）中には、学部・大学院と同窓会とのさらなる連携が求められています。今後とも、卒業生・修了生の皆様からのご支援を請けながら、学部・大学院の充実に務めてまいりたいと思います。

渭水会会員の皆様のますますのご発展とご健勝を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

今

グローバル社会の中で
豊かに生きられる人を育てたい

総合科学部副学部長（グローバル担当） さくまりょう 佐久間 亮



アメリカではイスラム教徒の入国を禁止し、メキシコとの国境に現代版万里の長城を築くなどと言う御仁が大人気。イギリスがまさかのEU離脱を選んだのも、移民規制への不満が背景にあるのだそうです。我が方を振り返ってみても、ヘイトスピーチを煽る団体の代表が都知事選でそれなりの票を集め、ヤフコメなどを眺めていると、上手いかない日中、日韓関係を背景にして、不寛容で排他的な空気がそこには充ち満ちています。

さて、こんな世界の内向き志向に風穴を開けるべく、わが総合科学部グローバル化推進室は日々奮闘しております、というのは風呂敷を広げすぎですが、それに近い思いで学部生の留学、国際交流をよりいっそう促進する目的で、上記推進室がこの4月から立ち上げられました。自己紹介が遅れました。4月からグローバル担当の副学部長を拝命し、推進室長をつとめさせていただいております佐久間と申します。

総合科学部は改組によりこの4月から、いわゆる文系学部として再出発しました。新たに国際教養コースを設置するとともに、グローバル教育のさらなる充実を図ることがこの改組の目玉です。その柱は、六つあります。まず、ACE (Academic Communications in English) プログラム。学部一年生からの一貫したプログラムの下で、英語によるコミュニケーション力を底上げし、留学した時に困らないだけのreading、writing能力を培います。二番目は英語による講義の拡充です。現代日本社会、日本研究、現代の国際情勢などが英語で講義されます。さらに、春・夏の数週間の海外語学・異文化体験研修を促進するために、これらを総合科学実践プロジェクトとして一括りにして、その成果を単位化することにしました。

四番目はグローバル人材育成学習プログラムです。留学を希望する学生は、海外への関心が旺盛ですが、反面、自国・自文化に疎いところがあります。ところが、留学してみると、否が応でも「日本代表」のユニフォームを着せられ、そうした事柄を踏まえていないと各国からの学生とのコミュニケーションがままならないことになります。そこで、このプログラムでは日本の歴史や社会、日本をとりまく情勢などに関する科目群を留学予定の学生に履修するよう促します。

こうして十分な準備を整えた学生たちは、世界各地の協定校へと派遣され、本格的な留学を体験します。長・短期の

留学生は年間50名を超え、さらに増加する勢いです。海外の協定校からやってくる留学生も長・短期合わせて20名程度になりました。留学をしない学生たちも、海外からの留学生との交流を体験することで、学部全体のボトムアップの国際化が図られています。そのための交流スペースであるカルチャラウンジは毎日賑わっています。

留学先での学修のみならず、世界各地からやってくる同世代と語り合い、現地の社会を体験して帰ってくることで、語学力はもとより、柔軟な思考力、コミュニケーション力、そして、異なる文化への想像力が豊かな人になって帰ってくる。そうした人材を一人でも多く輩出することができればと、推進室、さらには国際交流委員会の教員たちは、海外協定校の拡充、奨学金の獲得にと今日も奔走しております。現在の内向きな志向はグローバル化の結果です。しかしとめどなく進行するグローバル化=多文化社会化の下では、内向き志向の人は生きていきにくい、上述のような想像力豊かな人こそがよりよく生きられると思うからです。

総合科学部が展開する国際交流につきましては、以下のサイトに詳しく掲載されております。この事業につきまして、卒業生の皆様、会員の皆様のご支援を賜りますよう、どうぞお願い申し上げます。

<http://www.souka-international-tokushima-u.net/>



協定校訪問の様子



協定校の一つ、
ルンド大学（スウェーデン）。
1666年の創立



2016年3月、うれしいニュースが飛び込んできました。

「児童文学作家 くすのきしげのりさん、平成27年度 第8回とくしま芸術文化賞受賞」——とくしま芸術文化賞は、徳島県における芸術文化の振興に特に業績顕著な個人の活動を顕彰するために、平成20年度より公益財団法人徳島県文化振興財団が行っているもので、平成27年度は「とくしま芸術文化賞」を2名、「とくしま芸術文化奨励賞」を3名の方が受賞されました。

創作活動の傍ら、母校・徳島大学でも教鞭をとられ、また、精力的に講演活動も行っているくすのきさん。渭水会では、このたび、総合科学部設置30周年記念として、くすのきさんの講演会を開催することになりました。たくさんの方のご来場をお待ちしております。詳細は同封のチラシをご覧ください。



徳島大学総合科学部設置30周年記念

児童文学作家 くすのき しげのり講演会 「一人一人が、みんなたいせつ」 — 作品に託す願い —

- 主催／徳島大学 渭水会
- 共催／徳島大学総合科学部
- 後援／徳島市教育委員会、徳島新聞社、四国放送

●日時／2017年 1 月28日（土）14:00～

●場所／徳島大学総合科学部 2 号館

地域連携プラザ「常三島けやきホール」

●入場料／無料（要申込）

●定員／290名（先着順）

●お申込み方法

- ①同封のチラシの**申込用フォーム**を切り取り、必要事項をご記入の上、52円切手を貼って投函ください。FAX、メールなどでの受付はいたしません。
- ②**申込締切りは2016年12月10日（土）必着**です。（定員に達し次第、締切ります）
- ③当選された方には、事務局より「**入場整理券**」をお送りさせていただきます。

●お問合せ 渭水会事務局

TEL 088-656-7293 FAX 088-657-7467

携帯 090-2824-5006（事務局 大井）

info@isuikai.jp

●プロフィール

1961年生まれ。鳴門市在住。徳島大学教育学部卒業、徳島大学専攻科修了、鳴門教育大学大学院修了。「心豊かに生きる」をテーマに、大学在学中より始めた創作童話・絵本・詩・童謡など児童文学の創作活動と小学校の教育現場における「徳育」を中心とした教育活動を続ける。鳴門市立図書館副館長在職中には、民間との（協働）運営をはじめ、全国に先駆けた公立図書館における数々の改革や読書活動の推進に携わる。

2011年3月、50歳を前に退職し、4月にオフィスKUSUNOKIを設立。児童文学作品を中心とする様々なジャンルの作品の創作活動と講演活動を本格的にスタート。

青少年読書感想文全国コンクール課題図書に選定された『おこだでませんように』『メガネをかけたら』（ともに小学館）、氏のホームページのキャラクターにもなっている『もぐらのサンディ』シリーズ（岩崎書店）をはじめ、出版された作品は100冊以上。海外で出版されている著作も多い。現在、新作約30冊を出版準備中。

2011年 第2回JBBY（国際児童図書評議会）賞バリアフリー部門賞、2012年 第3回ようちえん絵本大賞 大賞及び特別賞を受賞。2011年 第7回阿波文化創造賞受賞。2016年 第8回とくしま芸術文化賞受賞。

日本児童文芸家協会評議員。日本童謡協会会員。徳島児童文学会会長。はるかぜ絵本の会代表。徳島大学総合科学部非常勤講師（道德教育）。四国大学文学部非常勤講師（絵本・児童文学創作）。鳴門教育大学大学院嘱託講師。

オフィシャルHP ➡ <http://www.kusunokishigenori.jp>





今、作家として思うこと

児童文学作家 くすのき しげのり

私が創作活動を始めたのは、40年ほど前のこと、徳島県立城北高等学校に在学中に当時「最も」と言ってよいぐらいマイナーな存在であった文芸部に入部してからです。文芸部では、詩や小説など書きたい作品を思いつくままに書いていましたが、徳島大学教育学部に進んだところから次第に児童文学が創作の中心となってきました。

卒業後、教育の現場に立つようになってからのことです。森信三氏の『修身教授録』そして安岡正篤氏の著作物に感銘を受け、以来、子どもたちの心を育てること、道德教育を学級経営、そして教育活動の基盤において研究と実践を続けてきました。その中で、学級の子どもたちの実態に合った、しかも文学的に質の高い作品を資料として使いたいと考え自作資料の作成として作品の執筆を続けてきました。

そんな私が大きな決断をしたのが48歳の時でした。私は、50歳を前に小学校教員を退職し、作家として創作活動に専念することにしました。当時すすめられていた管理職として50代を過ごすのではなく、プロの作家として、生活のすべてを創作のために費やし、作品を書くことだけで退職前と同様に生計を立て家族を養うのです。50代の教員の総収入を捨てて夢を追うということ。それは、私にとってとてつもなく大きな決断でした。もちろん作家として、作品が出版される保証も、またその作品が売れる保証もありません。実際、当時担当してくださっていた編集長からは、「(退職するのは)やめたほうがいい」と止められたのですから。それでも私は作家として作品を書くことに専念することを選びました。なぜか、私の中に書きたいことがたくさんあり、それを書くことができる自分の人生の中での時間の大切さを考えたからです。

現在、作家としての私は、生まれ育った鳴門市大麻町板東の自宅にある仕事場で、遠くに眉山を眺めながら作品を書いています。おかげさまで、海外での出版を含め年間10冊程度のペースで作品を発表しています。昨年度は、「すこやかな心を育む絵本シリーズ12冊」(廣済堂あかつき)、「いちねんせいの1年間シリーズ6冊」(講談社)が出版されたため、国内外で30冊あまりの新刊が出版されました。

私の作品の多くは、海外でも翻訳されて出版されていますが、私は、生まれてこの方徳島を離れて暮らしたことがありません。作家になってからも、一昔前のように、「作家として仕

事をするために出版社のある東京に居を構える」といった必要性を、私は全く感じません。なぜなら、情報技術の発達により、私が徳島にいて、出版社が東京にあって、画家がニューヨークにいて、翻訳者が韓国にいてという状況であっても、何らストレスを感じることなく仕事を進めていくことができるからです。そう考えると徳島は、クリエイティブな仕事をする上でとてもいい環境なのです。というか、講演で、北海道から沖縄まで全国各地を訪れますが、私は、おだやかな徳島が一番落ち着きます。

作家の仕事は作品を書くことです。そしてプロの作家であれば、たくさんの方が読んでくれる、さらには読み継がれるような質の高い作品を書かねばなりません。ただ、私が書く作品の中で、子どもが主人公のお話は、奇想天外な大事件が起こったり、魔法使いや魔女が出てきたりというものではなく、子どもの日常にある出来事が題材になっています。たとえば『おこだでませんように』(小学館)では、「主人公の『ほく』が七夕様の短冊にお願いを書いたら、先生がほくの思いに気付いてくれた」というお話です。ただこれだけのことですが、大人から見れば小さな出来事が、主人公の「ほく」にすれば、大きく世界が変わるほどの出来事であるのです。

私の作品では、こうした、日常生活の中での子どもたちの心の動きをテーマにし、どこのクラスにもいるような子どもたちや、その子どもたちに関わる大人たちが登場します。そして私が書きたいのは、そこにある祈りのような願いとしての希望と明るさ、さらには、子どもたちのことを思う大人、子どもたちが信じられる大人の姿なのです。

私は、一人の作家として、今までもそうであったように、これからも、この徳島の地で、自分が書きたいと思うこと、心が動いたことを、世界中の子どもたちに届ける、そして時代をこえて読み継がれる「物語る力のある作品」となるように書いていきたいと思っています。(昭和59年 教育学部中学校課程技術教室卒)

仕事場から眉山を望む



特集

文部省唱歌を編纂した 徳島師範学校出身の南 能衛



南 能衛

「どんどんひゃらら
南 能衛と小学唱歌の作曲家たち」

南 次郎(著)
近代消防社 刊
2,160円



♪どんどんひゃらら どんひゃらら……口ずさむと心が浮き立つ「村祭」。

日本人なら誰もが知っているこの曲の作曲者・南 能衛氏が、徳島市の出身であり、しかも、徳島師範学校(後の徳島大学教育学部)の卒業生であることは、あまり知られていません。

2014年7月、南 能衛氏の孫・南 次郎さんによる「どんどんひゃらら 南 能衛と小学唱歌の作曲家たち」が発刊されました。渭水会の皆さんに、南 能衛氏についてもっと知っていただきたく、氏ゆかりの富田小学校に顕彰碑の建立をと構想を語っておられる佐藤義忠さんにご寄稿いただきました。

さとう よしただ
佐藤 義忠

1 はじめに

日本人の心を育てた文部省唱歌「村祭」を作曲した南能衛は、徳島師範学校(徳島大学教育学部)の大先輩である。明治の教育近代化を推進するため、音楽教育でも西洋音楽を取り入れた文部省唱歌の創造に全力を注いできた。国家的プロジェクトであった文部省唱歌編纂のため南能衛は新進気鋭の最も若い編纂者として選ばれ大活躍をしていく。

それと同時に横浜市の市歌を森鷗外(作詞)とともに制作し、その作曲者として名を遺していく。

更に、台湾に赴き台南師範学校に台南交響楽団を創設し台湾の音楽教育推進に大貢献をした。

南能衛について横浜から横浜市歌の作曲者について問い合わせがあり、一回生の石原侑先生に問い合わせたのが始まりである。そのうち平成26年、南能衛の孫、南次郎氏が膨大緻密な調査研究による南能衛の伝記「どんどんひゃらら」を出版され、南能衛の歴史が明らかになりました。その名著を中心に紹介文を書かせてもらいます。

2 南能衛の略歴

明治14年7月19日 徳島市富田浦町西富田(弓町)生
明治24年3月21日 富田尋常小学校卒業
明治28年3月23日 徳島高等小学校卒業
明治31年4月 徳島県師範学校入学
明治34年2月18日 徳島県師範学校簡易科卒業
2月20日 富田尋常小学校訓導任命
9月12日 東京音楽学校甲種師範科入学
明治37年3月29日 東京音楽学校卒業
4月8日 徳島県立徳島中学校教諭任命

明治38年3月31日 和歌山県師範学校教諭任命
明治41年6月25日 東京音楽学校講師嘱託
唱歌編纂委員任命
楽譜調査員嘱託
9月5日 東京音楽学校助教授
明治42年6月6日 横浜市歌完成
作詞 森鷗外 作曲 南能衛
大正元年10月11日 東京音楽学校依願免職
唱歌編纂委員などすべての役職を依願免職
大正3年 兵庫県龍野の「東洋楽器製造」に技師長として就職
大正7年 台湾総督府台南師範学校赴任
昭和2年10月 台南師範学校依願退職
広島市の山中高等女学校音楽教師として赴任
昭和27年5月17日 死去(71歳)

3 南能衛の人生に影響を与えた庚午事変

南能衛の祖先は遠く、平将門の乱の平定に功のあった藤原秀衡(倭藤太)を祖とし、下野国小野荘出身の小野寺姓の流れをくむ。南北朝時代、阿波朽田城を得ていたが長宗我部の侵入により一字山に移り土豪となり、小野寺家は南家、喜多家、谷家に分かれた。南能衛の先祖は南家本家から分家して蜂須家に仕官し徳島城下に移った。その南家の堅夫が新居水竹等とともに庚午事変に連座し、内乱罪(国事犯)で切腹刑に処せられた。忠義の士に相続人が居なくなったので、妹のひさの夫・八束を養嗣子として家督を継がせた。南能衛は八束の長男であるが、叔父・堅夫の家督を継いだとの意識が強く、能衛の

即時断行の気性の奥にはこのような背景がある。

4 富田尋常小学校に入学

南能衛は父・八束が教員を務める富田尋常小学校に通った。同級生に市原キミ（後に人類学者・鳥居龍三^{とりいりゅうぞう}の夫人となる）がおり、互いに優秀な生徒で切磋琢磨し、明治31年徳島師範学校に進む。当時、徳島師範学校は唱歌教育の普及に学校をあげて取り組んでおり、オルガン教育にも熱心であった。南能衛もオルガンの演奏に力を入れていたという。

明治34年、富田尋常小学校訓導に任命され、母校の先生となるが、半年で休職して、東京音楽学校の師範科に進学することになった。明治40年から唱歌が小学校の必修科目となるのに、音楽教師とそれを指導する専門家が不足しており、秀才の誉れ高い南能衛と市原キミに白羽の矢が立ったのである。

5 東京音楽学校（現 東京芸大）に入学

明治34年、南能衛は大きな期待を持たれ東京音楽学校に入学した。上野の東京音楽学校には、その創

設者である伊澤修二によって明治の教育の近代化のために「東西二洋の音楽を折衷して新しい国楽を創生する。その新しい国楽を興すべき人物を養成する」—つまり西洋音楽を採り入れて日本にふさわしい唱歌を創造する人物を養成することが企図されていた。その代表が瀧廉太郎で、彼が席をおいていたとき南能衛は入学した。その後、作曲などの面で大きな影響を受けることになる。

彼が学んだ教授たちには、日本のオーケストラの父といわれるアウグスト・ユンケル、フランス人のノエル・ペリ（オルガン）、瀧廉太郎を見出した小山作之助（作曲）らがいた。ほかにも、幸田露伴の妹・幸田延と幸（ピアノ、ヴァイオリン）、後に『故郷』などの唱歌を世に送り出す岡野貞一（作曲）、田村虎蔵（音楽教育）……同級生には後に国際的に活躍したオペラ歌手・三浦環もおり、錚々たる顔ぶれというほかない。その後の南能衛の音楽家としての豊かな才能が養われたのであろう。

明治37年、東京音楽学校甲種師範科をトップの成績で卒業。奏楽堂での卒業演奏会ではレメンスの曲を赤尾寅吉（後に台北女子高等女学校で再会）とオルガン合奏をした。

村 祭

♩=84

村ともしもはうねんかみんさくでノ
ケハハメデイオマツツブリ
ドンヒヤララドンヒヤララドンヒヤララ
アサカラでキコエハルファミヤタイコリツ

『尋常小学唱歌』は1911年から1914年にかけて文部省が編纂した尋常小学校用の唱歌（教科）の教科書。第一学年用から第六学年用までの全6冊で、一学年ごとの収録曲は20曲。「村祭」は第三学年用に収録されている。

卒業後、徳島中学校に音楽教師として着任。明治38年4月、徳島師範学校に異動となるも、突然和歌山師範学校に出向を命ぜられる。和歌山師範学校では混声合唱団を編成し、優れた合唱団へと育成し、全国的に名を上げた。

6 東京音楽学校・文部省唱歌編纂委員に抜擢される

明治41年6月、東京音楽学校講師（後に助教授）。文部省唱歌編纂委員・楽譜調査員に委嘱される。

文部省唱歌を作成するための委員は、

委員長 湯原元一

作詞委員 富尾木知佳 吉丸一昌 乙骨三郎
高野辰之

楽曲委員 島崎赤太郎 楠美恩三郎 岡野貞一
南能衛 上真行 小山作之助

作曲主任・島崎赤太郎（ドイツ留学帰り）の右腕として南能衛が中心となって全国の音楽指導者にアンケート調査を実施した。委員の中で教育現場の経験があるのは南能衛だけであり、重要な役割をになっていた。

各学年の楽曲は20曲で、全学年で120曲を作曲しなければならなかった。委員による合議制ですべて匿名で文部省唱歌として編纂された。全委員の熱意と情熱により制作されたものである。

作曲主任・島崎赤太郎が小学唱歌について「西洋の作曲上の理屈を考え、西洋の作曲上の道具は使ったが西洋の曲ではない。（中略）これは日本人の曲である。日本人が書いたものでありますから、西洋人の心持ちは少しも入っていない」と言っている。

尋常小学校唱歌は、明治の国家的プロジェクトによって生まれたものである。現在も名曲として国民に愛されている。「故郷」「春の小川」「春がきた」「朧月夜」「日の丸の旗」「汽車」「鯉幟」「海」「かたつむり」「茶摘」「村祭」「村の鍛冶屋」は国民の誇りであり、島崎赤太郎、岡野貞一とともに中心的役割を果たした南能衛の功績を称え県民の誇りとすべきであろう。

※横浜市歌の作曲

横浜開港50周年を記念する横浜市歌制作が東京音楽学校に依頼され、南能衛が作曲を担当した。文豪・森鷗外による歌詞は格調が高く、南能衛の作曲は純然たる西洋音階を用い、伸び伸びした行進曲風

の元気な曲である。横浜市歌は今でも市民に大事に歌われているという。南能衛は、東京音楽学校に依頼された校歌の内、都立立川高校、仙台工業高校など15校の校歌も作曲している。

※東京音楽学校突如退職

順風満帆の南能衛の人生は暗転する。明治44年1月愛妻ムメが突然亡くなった。大正元年10月神谷わさと再婚したが、その4日後に突然依願免職した。東京音楽学校の助教授や文部省唱歌の編纂嘱託や横浜市歌の作曲など新進気鋭の作曲家として順風満帆の人生を歩み始めた矢先にすべての役職を投げうって依願退職してしまったのである。

当事東京音楽学校では、将来の日本の音楽界を考えてオペラや交響曲の指導ができる人物の招聘を考えていたのであるが、その人事について人物の状況から音楽学校を守るという正義感を盾に反対し、辞意を通し依願退職してしまったようだ。

7 オルガン製作所から台湾師範学校へ

初代東京音楽学校創始者・伊澤修二（妻は徳島藩士の娘）の支援で、兵庫県龍野の東洋楽器製造に技師長として就職した。南能衛は技術指導に尽力したが、その後製造所は倒産してしまった。伊澤修二は南能衛を台湾総督府学務課に推薦しており、南能衛は伊澤修二の説得で台湾行きを決断する。大正7年、台湾に骨をうめる覚悟で渡航し、やがて台南師範学校と台南中学校で音楽教師として活躍していった。台南師範学校では台南交響楽団を創設し情熱を傾けた。日本オーケストラの父と言われたアウグスト・ユンケルの作った管弦楽団の精神を台湾に根づかせようとしたのである。台南師範学校の生徒や近隣の小学校の先生たち総勢40人を超える本格的オーケストラを創り上げた。筆舌では尽くせない努力の結晶であり、偉大な音楽家というべきであろう。

台湾で優れた音楽活動をしていた南能衛は昭和2年10月またしても突然依願退職する。理由は「わが子の監督不行き届」である。南能衛の先妻の子である長女が南の同僚の教師と駆け落ちし日本へ帰ってしまうということに責任を感じ、義に反する行為に責任をとったのである。

その後日本に帰り、やがて広島市の私立山中高等女学校に就職し音楽教師として活躍し、昭和27年3

月19日亡くなった。

「明治から大正という日本が日本になろうとした時代に日本の子どもたちに与える音楽を作ることに真剣に取り組んできた南能衛は、だれよりも伊澤修二に忠実な弟子であり、伊澤修二の掲げた理想を生きようとした。天才瀧廉太郎にあこがれ、島崎赤太郎や岡野貞一らと長くこの国で歌いつがれる唱歌を世に出すこともできた。熱い心で子どもたちに音楽の楽しさを教えてくれた人間が南能衛であった」と南次郎氏は記している。

徳島師範学校・徳島大学教育学部・同総合科学部の後輩として、私達も南能衛の熱き想いを再認識していきたいと思う。

(昭和33年 学芸学部4年制中学校課程史学教室卒)



横浜市開港記念会館。平成29年(2017)に開館100周年を迎える

横 浜 市 歌

森 林太郎(鵬外) 作詞
南 能衛 作曲
市歌普及委員会 補修編曲

Tempo di marcia (♩ = 88 ~ 104)

わ が ひ の も と は し ま ぐ に よ
い ま は も も ふ ね も も ち ふ ね

あ さ ひ か が よ う う み に つ ら な り そ ば だ つ
と ま る と こ ろ そ み よ や は て な く さ か え て

し ま じ ま な れ ば あ ら ゆ る く に よ り ふ ね こ そ か よ え Fine
ゆ く ら ん み よ を か ー ぎ る た か ら ち い り く る み な と

Tranquillo *mf*
さ れ ば ー み な と の か ず お ー ー か れ ど こ の

よ ー こ は ま に ま さ る ー あ ら め や お か

mf
し ー お も え ば ー と ま や の ー け お ー り ち ら

mf
り ー ほ ら り と ー た て り し ー と こ ー ろ D.S. alla Fine

わが日の本は島国よ
朝日かがよう海に
連りそばだつ島々なれば
あらゆる国より舟こそ通え

されば港の敷多かれど
この横濱にまさるあらめや
わかし思えばとま屋の煙
ちらりほらりと立てりしところ

今はも舟も千舟
泊るころぞ見よや
果なく栄えて行くらんみ代を
飾る宝も入くる港

私の職場

総合科学部が創立されて早や30年。
国内外を問わず多方面の職場で活躍されている
渚水会々員の皆様に、職場の状況や特色、体験談など、
その職場ならではのエピソードを語っていただきました。

和菓子店

日本の、そして徳島の良いものを和菓子に

にし かわ よう こ
西 川 陽 子

昭和49年、日本がオイルショックに揺れる頃、私は総合科学部の前身である徳島大学教育学部に入学しました。

大学では、一年時の教養課程で幅広い知識を他の学部生と一緒に学び、専門課程では教育実習に小学校、中学校、特殊学校等に赴き教育現場を体験しました。

しかし私は当時としてはかなり異色な存在だったのかもしれません。教師になる道を選ばず、昭和53年の卒業と同時に、アナウンサーとして四国放送株式会社に入社し、「おはよう徳島」という番組を二年間担当しました。

そして昭和55年、結婚と同時に^{あかねあん}茜庵を主人と共に創業し、今年で36年になります。

時の経つのは早いもので、もう大学を卒業して38年。現在は、嫁、妻、女将、母、姑、ばあばと六つの顔を持つようになりました。

茜庵の創業時からのモットーは、良い素材を使い、その素材を生かしきるための手間暇を惜しまない事。加えて和の繊細な美意識を良い環境で、良いサービスでお客様に届けること。36年間変わらず茜庵が大切にしてきた想いです。

店舗には、四季折々の花を活けています。通りがかった方にも季節を感じていただき、ほっと和んでいただければと創業時より変わらず続けています。また、和菓子を通して茶の湯を体験していただく事も大切にしています。^{すけとう}助任小学校の茶道部の卒業茶会は茜庵の茶室で行います。当時の小学生がお母さんになって、そのお子さんが現在来てくださっています。また、徳島大学の留学生の方もお越しくださいます。^{つくばい}蹲の水で^{きよ}浄め、茶室に入り緊張した面持ちで茶道を体験し、日本の文化に触れていただいています。



茅の輪



七夕には着物姿でおもてなし



ついたお餅はぜんざいにして

最近、和の世界は何だか敷居が高く、面倒だと感じる世代が増えていると言われています。だからこそ茜庵が考えるのは、日本の伝統や文化を如何にお伝えし、楽しんでいただくかということ。

毎年6月30日には、店舗前に茅の輪を作ります。それを七夕まで設置し、夏越しの祓いをその意味と共に、お客様に体験していただく。そして七夕祭り当日は、子供たちの歓声が上がる中、くじ引きや、夜店風に色々なお菓子を提供し、茶室では社員が着物を着てお点前を披露して茶会を催しています。

また12月の第一日曜日にはお餅つきをします。社員は昔ながらの餅つき姿でお迎えし、石臼と杵でお客様と一緒に餅をつき、ついたお餅を善哉にして振る舞っています。どちらもたくさんのお客様の笑顔を見ることができ、作り手との交流の場として大事に続けています。

また、今の生活に合わせた和菓子の取り入れ方を提案させていただき、若い世代にも伝えていくお手伝いができたらと思っています。

素材を吟味し、美味しいものを作るということは大前提ですが、お菓子の形を時代に合わせるということも重要だと思っています。例えば羊羹を一本も切っても、切るのも大変。そんな声に、和三玉とい



一口菓子

う商品を開発しました。これは、チョコレートのトリフ感覚で召し上がっていただく一口羊羹。五色の玉が可愛いゆうたまは、四国のこだわりの果汁と寒天で作った和のゼリー。お嫁さんのお菓子からヒントを得た、四季の絵柄を描いたふやきの風流姿。何れも、可愛いパッケージに仕立てました。結婚式のプチギフトとしても好評です。

主人と始めた茜庵も、2012年大阪への出店をきっかけに、今では全国にお客様を持てるようになりました。振り返ると、多くの社員との関わりがありました。結婚の為退社したスタッフが、子育てが一段落し、再び入社して活躍してくれるなど、うれしい再会もあります。また、保育園の時に食べた和菓子が忘れられなくて、和菓子職人となって入社したという社員もいます。

私にとって、会社はもちろんのこと、社員一人一人の成長を見ることは何にも代えがたい喜びです。今思うと徳島大学で学んだ4年間。このことが、後の子育てや、社員の育成に私の大きな力となりました。還暦を過ぎた今、これからは社員が輝く場を作っていく。そのことに全力を注ぎたいと思っています。四国、徳島の良い素材を世界に発信することと併せて！ (昭和53年 教育学部小学校課程数学教室卒)

INFORMATION

●菓游 茜庵〈本店〉

住所 〒770-0852 徳島市徳島町3丁目44(専用駐車場有り)

TEL 088(625)8866 FAX 088(625)6780

営業時間 9:00~19:00

※季節の和菓子、夏はかき氷、冬はお善哉などがいただける「お呈茶席」のご利用は10:00~17:00

定休日 無休(元旦のみ休み)

公式HP → <http://www.akanean.com>

facebook → <https://www.facebook.com/akanean.jp>



さまざまな職種・職場をご紹介します。ご寄稿、ご紹介お待ちしております。

進 | 路 | 通 | 信

求人票を送付ください

昨今の大学就活状況

就職委員長 いしだ もとひろ
石田 基広

既にテレビや新聞報道などを通してご存知でしょうが、平成26年度より学生の就職活動に関わるスケジュールが大きく変更されています。

平成25年度までは企業の広報活動は12月に解禁され、年が明けた4月から採用選考が始まり、10月以降に正式な内定が出る流れでした。

ところが政府および経団連の調整の結果、平成26年度卒業生については3月に企業の広報活動が解禁、そして夏休み中の8月から選考開始とスケジュールが変更されました。この変更について、政府および経団連側は「学修時間の確保」と「留学等の促進」が目的だと説明しています。

そして、このスケジュールは今年度また変更され、平成28年度卒業生は3月の就活解禁から3ヶ月後の6月から筆記ないし面接などの選考に挑むことになりました。厚生労働省 大学等卒業予定者の就職・採用活動等について～「指針」及び「申合せ」～ <http://www.mhlw.go.jp/topics/2010/01/tp0127-2/15.html>

つまり学生達はきわめて短期の期間の間に、エントリーあるいは就職説明会に参加すべき会社を選び、選考に臨むことになります。

また企業側では6月の選考開始とほぼ同時に内々定(正式な内定を出せるのは10月)を学生に通知しており、マイナビなどの就職関連サイトの調査によれば全国平均で約65%の就活生が6月末までに内々定を得ていると報告されています。

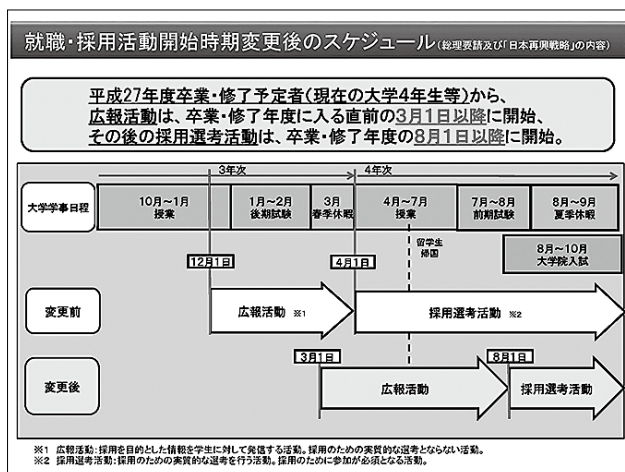
幸い、昨年度に続き本年度も企業の採用意欲は高く、大卒求人倍率は1.74倍で、完全な売り手市場の状態です。複数の企業から内々定を得ている学生も多く、いずれの会社に決めるのか迷っているという話もよく耳にします。また内々定を得ても半数近くが就活を終了せず、夏休みの間も就職活動を継続する意向を示しています。このため10月に正式な内定の交付以降、改めて新卒学生の募集に力を入れる企業も多いと考えられます。

新しいスケジュールによって、就職活動は短期集中型に変更したかのような印象もありますが、実際には、多くの学生達が秋口まで比較的長い就活を強いられることになっているものうかがえます。

最終的には今年度末においても、総合科学部の卒業生達の就職率は高い数字が期待されますが、秋の第二波の募集に向け、総合科学部就職委員会教員一同、学生達のサポートにさらに力を注いでいく所存です。

渭水会の皆さまには、引き続きキャリア支援室まで就職関連情報をご定常いただければ幸いです。

〔送付先〕 〒770-8502 徳島市南常三島町1丁目1番地 国立大学法人徳島大学 キャリア支援室
TEL 088-656-7635 FAX 088-656-7636 E-mail gkseysu@tokushima-u.ac.jp



図は「日本再興戦略」(平成25年6月14日閣議決定)より抜粋、首相官邸サイト http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ywforum/zikihenkou_info.html より



読書と人生

大学院総合科学研究部(教養教育院)教授

いし かわ えい さく
石 川 榮 作

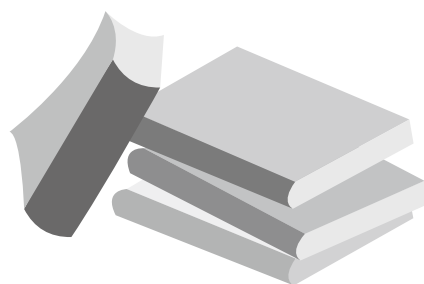
徳島大学で昭和53年4月より39年もの長きにわたって教鞭を取ってきましたが、今年度末で定年退職を迎えることになりました。この連載コラムも、今回で終わりということになります。

徳島大学では着任当初は教養部でドイツ語ばかりを教えていましたが、平成5年に総合科学部教員となってからは、それ以外にもさまざまな授業を担当することとなり、最近まで旧カリキュラムの学部共通科目「キャリアプラン入門Ⅰ」の中では「読書と人生」というテーマを担当しておりました。その中で私はこれまでの自分の読書体験を通じて、読書のおもしろさと大切さを指摘し、読書が人生を豊かにしてくれることを強調してきました。そして今年4月からは常三島地区改組により教養教育院に配置換えになる一方、併任のかたちの総合科学部での卒業論文指導では学生とともに岩波文庫でヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』を読み、これまで以上の感動を覚えて、人生において読書が必要不可欠であることを再認識したところです。

私が大学生になった頃は、岩波文庫が学生の必読書のような感じで、哲学関係の岩波文庫を手にしたときには、こんなにも難しい本を読んでいかなければならないかと、気が遠くなるような気持ちになったことを覚えています。今ではそれらもなんとか読めるようになり、読書が私の趣味の中でも大きな部分を占めています。学生時代にむさぼるように読んだ本を、大学教員となって読み返すのもたいへん楽しいことでした。ショーペンハウアーも『読書について』（岩波文庫）の中で述べていますように、「重要な書物はいかなるものでも、続けて二度読むべき」です。二度目になると、前後のつながりがよりよく理解できるからです。さらに数年経って、読み返すと、自分の成長とともに、また別の新たなものに会えることができます。読書の真の楽しみは、繰り返し読んで、以前とは違った新しいものに出

会って、それに感動することにあります。読書をするということは、まさに新しい自分に出会うということです。中学時代や高校時代には、読書は漢字を覚えるとか、読解力をつけるとかいったレベルに過ぎませんでした。しかし、長い目でみると、読書を積み重ねることから得られるのは、単なる幅広い知識だけではなく、すべてのものを大きく包み込む「包容力」であり、すべての小川を受け入れる太平洋のように「大きな広い心」です。それが「真の教養」というものではないでしょうか。どこかの本に書いていたことの受け売りですが、「教養」とは底が抜けたバケツに水を入れて、それでもバケツの隅にくっついているようなものです。上記のショーペンハウアーも同じところで、「一般に精神的食物も、普通の食物と変わりはなく、摂取した量の五十分の一も栄養となればせいぜいで、残りは蒸発作用、呼吸作用その他によって消えうせる」と述べています。それでも読書はそれに携わっている過程で人生を豊かにしてくれるものです。私の場合にも読書で得た感動が自分を育ててくれたことは確かです。定年退職後も読書は欠かさず続けていきたいと考えています。

最後に、渭水会会員の皆様方のますますのご健勝をお祈りして、この連載コラムを終えたいと思います。7年間もの長い間、ありがとうございました。



研究最前線

平成28年度総合科学
優秀賞受賞者の先生に
ご寄稿いただきました

ヘイトスピーチの背景を探る——在特会調査から

大学院総合科学研究部准教授 ひぐち なおと
樋口 直人



「これ以上朝鮮人をのさばらせたら日本人が殺される」
「犯罪朝鮮人を皆殺しにしろ」
「コリアンタウンを焼き尽くせ」

——これらはすべて、2000年代後半以降の日本で、「在日特権を許さない市民の会（在特会）」という団体のメンバーが街頭で叫んだ言葉である。在特会は知らなくても、ヘイトスピーチという言葉ならご存知の方も多いのではないだろうか。日本語の語彙になかったこの言葉を、流行語大賞トップ10に押し上げたのは、冒頭で挙げた在特会の所業によるものである。

私は、教育と研究は別物と割り切り、狭い専門分野について学生に教えることはなかったから、卒業生でも私が何を研究しているかほとんど知らなかったのではないかと思います。オランダでの在外研究から2010年に戻り、それから在特会の活動家に対して聞き取り調査をしていたが、3回担当した社会調査実習でも取り上げたことはなかった。自分の調査に受講生を連れていくのが労力的には一番楽ではあるが、逮捕者を複数出すような団体の調査に同行してもらうのは無理だろうと思ったことによる。

だが、今にしてみると調査実習で取り上げれば教育効果もあったのでは、と考えるようになった。大学の教員は、光の当たらないテーマを地道に研究するのがほとんどだが、稀に社会的関心と自分の研究が重なることがある。私にとっては、それが在特会の問題であり、調査結果をまとめる最中に社会的関心が高まっていった。

分析をまとめたものを、『日本型排外主義——在特会・外国人参政権・東アジア地政学』（名古屋大学出版会、2014年）として出版したが、これは文献リストだけで37頁あるような純然たる学術書である。ところが、関心の高まりに見合う情報量がなかったため、私が書いた本も時事的な情報源として注目され、学会誌はもちろん新聞、オヤジ向け週刊誌、右翼雑誌からファッション誌に至るまで取り上げられた。

調査実習で取り上げるのは、交通費のかからない手近なテーマであることが多い。これは、受講生の負担などを

考えるとやむを得ないことともいえるが、テーマ自体で盛り上がるようなものではない。それに対して、在特会の調査ならばメディアで次々に取り上げられる現実の一端を調べることになり、受講生のモチベーションも違ったものになったのではないか。

それだけではない。ヘイトスピーチは徳島から隔たった問題と思われがちだが、実は大いに関係がある。私が専門とするテーマは、都市部の学生ならば関心を持つけれども徳島大学では実感を持って理解してもらえない、そう思いこんできた。しかし、在特会が起こした3回の刑事事件のうち1回は、徳島県教職員組合の襲撃事件だった。さらに、2014年には遍路道の休憩所で韓国人を中傷する張り紙が見つかった。

ヘイトスピーチは徳島にも大いに関係があり、かつ社会的に重要な問題であった。そうした実感を持ってもらえば、単に1年間実習を受講したにとどまらない教育効果があったのではないか。生々しい問題だからこそ、大学教育で取り上げるという選択肢を、今後はきちんと考えておかねばならないと思われた。

ただし、学生の関心は長続きしないし、マスメディアの関心のサイクルもまた短い。2016年にはヘイトスピーチ解消法が成立し、この問題にも一段落ついた感がある。これで在特会に対する関心も薄れていくだろうが、研究としての真価が問われるのはこれからである。社会科学の世界では、今でも何百年も前に書かれた古典の研究が一定の地位を占めており、どれだけ広く長く読み継がれるかが研究の価値をはかるものさしとなる。

『日本型排外主義』の賞味期限がどれくらいあるかはわからないが、韓国語版と英語版が出たのは研究者としては一番嬉しいことであった。文系の学問は言語と国境の壁に阻まれるが、翻訳が出ることで違った読者と出会うことができる。今回の受賞も、三言語で出版されることが大きな理由であり、五十路を前にして世界を広げる機会を持てたことに感謝したい。

元 渭水会会長「井内孝幸先生」を偲ぶ

徳島県文化振興財団理事長 佐藤 勉^{さとう つとむ}

井内孝幸先生

12年間という長きにわたり会長として私たちの渭水会を牽引して下さり有り難うございました。まさかこんなにも早く先生とお別れすることになるとは夢にも思っていませんでした。

先生と私の出会いは昭和58年に附属中学校の副校長として着任されたときに、私も城東中から転入いたしました。

先生は、学芸学部の中学校教員養成課程の数学科を昭和28年3月に卒業され直ちに附属中学校に奉職されました。

その後27年間にわたり数多くの後輩を教育現場に送り出すとともに、数学の教官として様々な教育研究に取り組み、「教材・教具の井内」として徳島はもちろん全国の数学界にその名声を轟かせました。

その後、木沢中学校の校長を経て、古巣の附属中学校に帰ってこられたのです。

管理職として附属中4年間の在職中には、徳島大学教育学部から鳴門教育大学学校教育学部へと附属学校は移管され、その大事業に奔走され、見事成し遂げられた先生の姿は、今でも私の心に鮮明に残っています。

また、私が城東中学校に校長として17年ぶりに、2度目の赴任をしたときには、私の4代前の校長と



「牟岐少年自然の家」の宿泊訓練視察にて（昭和61年7月）。左から石川和幸氏、佐藤勉前会長、井内孝幸元会長

して校長室に掲げられた写真を見上げながら何時も「勇気や元気」を頂いたことも今となっては良き思い出の一つです。

一方、井内先生は芸術家としての業績にも目を見張るものがあります。管理職として多忙な中、昭和58年より文楽人形師「4代目大江巳之助」氏に師事し、伝統工芸の木偶作家として活躍されました。

様々な展覧会を開催する傍ら、平成12

年には仲間の人たちと阿波木偶作家協会を設立し、後継者の育成にも積極的に取り組まれたことは、伝統文化の継承を願う関係者のみならず、徳島県民にとって大変有り難いことでありました。

平成18年には徳島大学の日亜会館の落成に当たり、渭水会会長として人形浄瑠璃「傾城阿波の鳴門」の名場面「お鶴とお弓」を寄贈され、現在その貴重な作品は大学本部の特別応接室に飾られています。

大学を訪れた機会には、新蔵町の本部にもお立ち寄り頂き、井内先生の力作の「頭」と泰子夫人の見事な衣装をご覧頂き、在りし日の先生を偲んで頂きたいと思います。

井内先生との思い出は語り尽くせませんが、徳島県の芸術文化の振興に携わる者の一人として、先生が誰よりも情熱を傾けて取り組まれた木偶製作の偉業を後世に継承していくことを改めてお誓いしたいと思います。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。合掌。

（昭和45年 教育学部中学校課程技術科卒）



佐古一番町の川島病院に寄贈された井内先生制作の木偶人形。「傾城阿波鳴門」のお弓、お鶴、十郎兵衛が揃った力作で、これが遺作となった。ロビーに展示されている

輝く新星

第2回 渭水会 会長賞

平成26年度より、創設された「渭水会会長賞」。これは、学業成績優秀で研究及び学生としての活動全般において、模範となる優れた学生に対して贈られるものです。

平成28年3月23日（水）、総合科学部1号館第2会議室において表彰式が行われました。

平成27年度（第2回）渭水会会長賞の受賞者は

角谷健太さん（総合理数学科 数理科学コース）

富永美咲さん（人間文化学科 心理・健康コース）

中川雅貴さん（人間文化学科 国際文化コース）の3人です。



左から石井会長、富永さん、角谷さん
（中川さんは体調不良で欠席）

学び続けること



かくたに けんた
角谷 健太

大学受験に失敗した私は、一年間浪人生活を送った結果、徳島大学総合科学部に入学しました。徳島大学を志望した理由は、総合科学部総合理数学科では、数学の専門的な知識・技能の習得はもちろん、中学校や高等学校の数学の教員免許状が取得できると聞いたからです。私は、中学生のころからの夢であった「中学校教師」になるために、入学以前から大学では今まで以上に勉学に励もうと決めていました。実際に、様々な分野の勉強をさせていただくことで、大学で学ぶ楽しさや難しさを知り、入学以前より勉学に対する意識は高まっていきました。

大学生活を送るにあたって、所属していた部活動で「学ぶ」大切さを知りました。私が所属していた

バレーボール部では、指導者がいない中、自分たちで設定した目標に向かって努力してまいりました。部員の人数は決して多くはないですが、厳しい4年間を仲間とともに支えあってきたことも良い思い出です。そのような中で、私はチームの主将をさせていただき、統制力を磨きました。練習メニューを考え実行し、うまくいかないところは修正しますが、チームメイトの意見も尊重しながら主将の役割を果たすことは非常に大変でした。私が悩んでいたときに、チームメイトの一人がアドバイスをしてくれました。私は素直に受け入れ、その日以降からそのアドバイスを参考にしてみると、部員の士気が高まったことを今でも鮮明に覚えています。私は「学ぶ」ことが私や部員を変えたのでは、と実感し、「学ぶ」ことで考え方やまわりを取り巻く環境が大きく変化していくことがわかりました。

現在私は、夢であった中学校の教壇で数学やその他様々なことを教えています。社会人1年目とはいえ、子どもたちからすれば「先生」なので、筋の通った指導をしていかねばなりません。指導方法はまだまだ未熟で、私自身、今も学び続けています。学ぶことで、日々考え方が変化していきますが、これが私の成長する姿だと考えています。徳島大学の学生の皆さん、楽しい生活や多忙な生活等、いろいろな生活があっていいと思います。しかし、その中



部活動の大会にて

でも学ぶことはたくさんあると思います。学び、考え、自分のものにする。学ぶということが素晴らしいことであることに是非気付いてほしいと思います。そのためにも、ご自身で時間を有効活用していただけたらと思います。

最後になりましたが、渭水会会長賞をいただいたことを大変光栄に思っております。こうして大学生生活を振り返る機会をいただき、もう一度大学生活を送りたいと思う反面、社会人としての自覚も持つことができました。やはり、この4年間自分の夢に向かって努力して本当によかったように感じます。私が教員として子どもたちの未来に携わるにあたって、徳島大学で学んだことが土台になっていくと確信しています。しかし、今後数十年の教員生活の中で、必ずつまづくことが多くあります。「学び続ける」姿勢を忘れず、前向きに何事にも取り組んでま



教壇にて

いりたいと考えております。徳島大学の先生方をはじめ部活動のチームメイト、大学生活で私と関わっていただいたすべての皆様、本当にありがとうございました。

(平成28年 総合理数学科数理科学コース卒)

★ 大学生生活を振り返って

総合科学教育部臨床心理学専攻 修士課程1年 とみなが みさき 富永 美咲



私は、平成28年3月に徳島大学総合科学部人間文化学科心理・健康コースを卒業し、4月からは徳島大学大学院総合科学教育部臨床心理学専攻にて、引き続き日々学ばせていただいております。

「大学生活って、どんなものだったかな？」と大学4年間のことを振り返る時、1番に思い浮かぶのは被害者支援につなぐ会TSUNAGUや公益社団法人徳島被害者支援センターでの活動です。TSUNAGUとは、徳島大学の内海千種准教授のもとで、事件や事故、災害等の被害者の支援について自らの理解を深めると共に、多くの人々に被害者支援について理解し、関心を持ってもらいたいという気持ちから、有志の学生主体で活動している団体です。

TSUNAGUでは大学祭において、先輩方や同級生、後輩と協力しながら、被害者支援に関するパネル・ポスターや書籍の紹介、防犯・防災グッズの展示、呼吸法によるリラクセーションの体験等を通して、啓発活動を行ってきました。4年生からは、TSUNAGUのコアメンバーとして、大学祭での啓発活動に向けて、展示物の内容や啓発活動の準備、

運営に携わらせていただきました。また、徳島県警察のご厚意で、TSUNAGUのメンバーの1人として犯罪被害者支援スローガンのポスター作成に関わり、徳島県警察本部情報発信課長様から御礼状を賜るという貴重な機会をいただきました。3年生の時に支援活動員養成講座を受講し、4年生の時から徳島被害者支援センターにてボランティア活動をさせていただいております。徳島被害者支援センターでは、広報啓発に関する封入作業や街頭での広報活動、講演会や支援活動員養成講座でのお手伝い等に携わってきました。中四国で行われる被害者支援に関する研修会にも参加させていただき、徳島大学、および大学院の外での学びの機会を与えてもらっています。平成28年3月には徳島県警察本部、徳島被害者支援センター、TSUNAGUと共催での講演会の運営、講師との打ち合わせ、講演会での司会等も経験させていただきました。この他にも、被害者支援に関する講演会や講習会に自ら足を運ぶこともありました。こうした活動は、大学生活の内のたった2年間のことですが、今の私に、これからの私につながる、大変貴重な経験になったと思います。

私が、TSUNAGUや徳島被害者支援センターでの活動から学んだことは、2つです。1つは、「つながる」ことです。これは、被害者支援に限らず、自分の関心のあるものに自らアプローチすること、そして内海先生をはじめTSUNAGUのメンバーや徳島被害者支援センターの職員の方々、周囲の人々とのつながりを持つということです。大学祭や講演会の企画、準備、運営は、決して私1人で成し遂げたわけではありません。TSUNAGUメンバーが互いに協力し合って運営に関わり、内海先生や徳島被害者支援センターの職員の方、周りのみなさまが支えてくださったからこそ、自らの被害者支援に関する理解を深め、大学祭や講演会等を通して多くの人に被害者支援に触れてもらう、つながりを持ってもらうことができたと思います。TSUNAGU等の活動から学んだことのもう1つは、「自分にもできることがある」ことを実感できたことです。先のことと関連しますが、大学祭や講演会の実施にあたっては、各々が役割を持って活動することが求められます。このことから、集団の中でも「自分にもできること」という役割を持って活動することの必要性に気付かされました。また、一見すると被害者支援に関



作成したポスターと



これまでにいただいた受講証や修了証など

係のない絵を描くことでも、啓発のためのポスター作成という形で被害者支援に携わることもできました。被害者支援に限らず、例えば小さなことでも「自分にできること」の積み重ねが、今回の賞をいただいたように周囲の方に認められることを実感できました。今後も、周囲の人々と「つながり」、「自分にできること」を1つ1つ積み重ねながら、微力ながら被害者支援に携わりたいと思っています。

最後になりましたが、この度は徳島大学渭水会会報に寄稿できるという貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。この賞をいただくに至り、支えてくださったみなさまに、心より御礼申し上げます。TSUNAGUは、毎年、大学祭にて啓発活動を行っております。機会がありましたら、ぜひ足をお運びください。

(平成28年 人間文化学科心理・健康コース卒)



姉妹都市提携、多くの人に支えられて ここまでくることができました

なかがわ まさき
中川 雅貴



「お前本当に卒業できるのか？」そんなフレーズを耳が痛くなるほど聞いた大学生活、そんな私も現在は外資系商社マンとして働いています。大学2年生まで英語どころか海外にも興味がなく、目標を持たず毎日を過ごし、教授や先生にも本当に迷惑ばかりかけていた生徒でした。ましてやこのように表彰いただくなんて思ってもみませんでした。

私は大学3年生の時、留学をしてみたい、なんとなくかっこいい、行ったら英語も話せるんじゃないかという安易な考えから、日本から最も近い留学先、韓国へ1年間留学しました。そこで韓国語、英語の授業を取り、日々もまれながら数ヶ月が過ぎました。その時初めて、留学しただけじゃ語学は身につかないんだ…と自分の浅はかさに気付かされたと同時に、様々な留学生と出会ったことで世界の広さを痛感しました。現地では積極的に物事に挑戦するよう心がけ、その結果、帰国前には“King Of Exchange Students”として留学生代表で表彰をしていただきました。

帰国後は、英語講師として学内で英語を教えながら、留学中に吸収したことを大学図書館や市役所で展示・講演し、出来るだけ自身の経験を共有する機会をいただきました。そんな中、ゼミの一環でラト

ビア・イエルガワ市にあるラトビア農業大学へ学校訪問に行く機会があり、訪問させていただきました。あまり知られていない国であるため不安も多くありましたが、到着して間も無く、その不安はなくなり、むしろ感動に変わりました。

イエルガワ市に行ってもまず感じたこと、それは徳島と同じ匂いがすることでした。時の流れ、地形、人の温かみ、多くのことにシンパシーを感じました。ここで私は、野望ながらも“徳島市とイエルガワ市 姉妹都市プロジェクト”を立ち上げることを決意することになります。

帰国後、イエルガワ市をはじめラトビアについての文化や歴史的背景、語学を勉強し、そして現地に住んで直接文化交流を行うことを決めました。

もちろん提携などなかったラトビアの大学へ留学することは非常に困難を極めました。多くの人に反対もされましたし、そもそも相手にされなかったかもしれません。しかしラトビア大学に直接連絡をとり、徳島大学から多くのサポートを受け、私は2014年8月から約7ヶ月間、ラトビアへ留学をすることができました。

大好きな徳島から大好きなラトビアへ、複雑な気持ちが入り混じっていましたが、私は現地でしかできないことをリストアップし、実現することだけを信じ日々過ごしました。ラトビアでは、あえて首都リガにあるラトビア大学へ通い、ラトビア語やロシア語、バルトの歴史などの授業を取りながら、日本語の授業を聴講し、現地で日本文化や言語を出来る限り伝えました。一方で、ラトビア農業大学や徳島大学をはじめ、ラトビア外務省や駐日ラトビア大使館、徳島市役所と連絡を取り、定期的に徳島大学教授との電話ミーティングや外務省訪問を行いながら、立ち上げたプロジェクト実現に向け全力を尽くしました。

帰国後すぐに、徳島市役所や駐日ラトビア大使館と連絡をとり、ミーティングを重ね、韓国の時と同様、市役所や大学などでラトビア留学の経験を展



受賞の様子

示・講演させていただきました。1人でも多くの方にラトビアという国、徳島との繋がりや共通点などを知ってもらえるよう努め、新たに二つの目標を掲げました。

それは、“徳島大学とラトビアの諸大学（ラトビア大学とラトビア農業大学）の提携”と“ラトビア大使による徳島の表敬訪問”でした。地形、文化、歴史、そもそもなぜラトビアなのかを掘り下げて研究を重ね、2015年10月、駐日ラトビア大使の徳島表敬訪問が正式に決まりました。大使訪問の様子は新聞やメディアにも取り上げていただき、本プロジェクトの大きな第一歩となりました。加えて正式にラトビア農業大学との学部間提携が決まり、現在は大学間提携に向けて動いています。卒業間近、2016年3月には、ラトビア農業大学を訪問し、現地の学生、市民の方に直接アプローチさせていただきました。

もともと、この活動の原点は、両市の持っている良さをお互いの市民の方々に知ってほしいという気持ちから始まりました。私は姉妹都市に固執はしておらず、両市が文化交流を行い、お互いの良さを知ってもらえれば本当に嬉しく思っています。社会人になった今、学生としての立場ではなくなりましたが、この経験を忘れることはありませんし、今後も続けていきたいと思っています。

多くの方に支えられて送ることができた学生生



ラトビア農業大学、本プロジェクト講演の様子

活、こんなちゃらんぽらんな僕が成長することができたのは、周りの方、そして徳島大学のおかげです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

信じれば必ずどこかに道は開けます。これから学生生活を送るみなさん、いま在籍しているみなさん、何か目標を持って、野望を信じて毎日を送ってほしいと思います。これからのみなさん、徳島大学の発展を心から願っています。

（平成28年 人間文化学科国際文化コース卒）

※総合科学部は2016年3月16日にラトビア農業大学と学術交流協定（部局間協定）を締結しました。



徳島大学総合科学部渭水会会長賞表彰要項

（目 的）

第1条 学業成績優秀で、研究活動及び学生としての活動全般について、模範となる優れた学生を表彰する。

（表彰人数）

第2条 学部学生3名とする。

（表彰者の選考）

第3条 4年次前期終了までの成績・研究・社会活動等に基づいて行う。

第4条 次の基準に該当し、人物優秀な者について行う。

(1) GPA上位者

(2) 研究活動、社会活動等で優れた業績を有し、他の学生の範となる者

（表彰の決定）

第5条 表彰の決定は、学部長が招集する選考委員会で協議し、渭水会会長に推薦し、決定する。

（表彰の時期等）

第6条 表彰は、4年次後期に渭水会会長が行う。副賞として1名につき5万円を給する。

附 記 (1)この要項は、平成26年6月7日(土)の総会で決定し、同年度より実施するものとする。

(2)この要項の改廃は、総会の議によって行うものとする。

総科のおたから

其ノ四

せんりゅうじ 仙龍寺天井画

総合科学部教授 桑原 恵 くわばら めぐみ

徳島大学総合科学部正門を入ってすぐの「常三島けやきホール」の一階には、鳴門の山西家から寄贈された仙龍寺の天井画が掛けられている。鳴門の山西家は、江戸時代後期に鳴門で廻船問屋を営み、一代で巨富を築き上げた豪商のご子孫である。江戸時代の徳島は、塩・藍・たばこ・木材・和^わ三^{さん}盆^{ほん}糖^{とう}など特産品を多く産出していた。山西家は、徳島の特産品を諸国で売り、良質の肥料や米などを阿波に持ち帰った。肥料は、特に上等の藍を育てるためには、必須であった。山西家は江戸時代末期には、北海道のニシン漁の漁場を持つまでに発展し、北は北海道から南は九州までを結んで交易する廻船問屋であった。

山西家の初代当主は、このようにして得られた富

を鳴門の庶民に還元したいとの思いから、鳴門の金^{きん}光山^{こうさん}の山頂近くに建立したのが仙龍寺である。仙龍寺の本堂には二〇八枚の格子天井に極彩色の花鳥図が描かれており、参拝した人たちの目を楽しませていた。「常三島けやきホール」一階の天井画は、内陣（ご本尊を安置している部屋）の天井画で、長さ四mの一枚板四枚に、牡丹と孔雀が描かれている。

山西家文書を本学附属図書館に御寄贈頂いているご縁もあって、この天井画一式も総合科学部に寄贈頂いた。この見事な天井画は、できれば常設展示したいとの思いから、けやきホール一階に掲げさせて頂いている。この見事な天井画を通して、鳴門の廻船問屋山西家の繁栄、さらには江戸時代の徳島の繁栄に思いを馳せて頂ければ幸いである。



本尊が安置されていた内陣の天井画。
本尊は大阪の仏師に依頼して作られた千手観音である



けやきホール1階に常設展示されている

一原風景一

まつかわ
松川

ひろし
寛



60年ほど絵を描きつづけてきました。目指す山の頂上はそこに見えているのに、その山のふもとをぐるぐると無駄にまわり続けた60年だったように思えるのです。少しは目指すものに近づいたかと、時に立止まって山頂をみるとそれはさらに遠くの高みにあるのです。

ふるさと・故郷・古里を遠く離れて暮らす人、暮らしてきた人達が抱く故郷への想いと、私の抱くそれとは、随分ちがったものでしょう。

私は60数年、ほんの一時期をのぞいてこの徳島に住んでいます。今、私は徳島市近郊の町にすんでい

ますが、幼少期から高校卒業まで穴吹町古宮（旧美馬郡古宮村）ですごしました。山の斜面に民家がはりつくように点在するまじしい山村でした。

谷間の雪が消え、冬枯れの山に僅かに春の気配が感じられると、谷あいには山桜の花が咲き、やがて柔かい芽吹きの色が、山裾から山頂へ日一日と、確実に春を運んでいく早春の季節……。谷川で冷たい水に震えながら魚を追って淵に潜って、つい深みに潜りすぎ、暗い水の碧の無気味さに恐怖した夏の日……。枯葉が積もった学校からの帰り道、暗い空から舞い落ちる初雪にわけもなく興奮した晩秋の午後……。



「廃村への道」

私の子供の頃の記憶の多くは、季節の移ろいの中に鮮明です。四季はカレンダーの上ではなく、日々の生活の実感としてありました。移り変わって行く自然―山の色、雲のかたち、風の匂い―の中に季節は、肌で感じられるものでした。

村の生活は自然の一部であり、農作業も山の労働も、子供の遊びも季節の移り変わりにつれて一年を周期に繰り返されていました。

当時、子供とはいっても大切な労働力の一部であり、多くの子供達は、家の仕事の手伝いに汗を流しながら、その季節季節の遊びを楽しんだものでした。

五月の節句、夏祭り、お盆など、大人も子供も村の神社やお堂に集まって田舎芝居や、草相撲、夜は遅くまで踊りを楽しんで過ごしていました。

そんな時は、貧しい中でも人々は、底抜けに明るくおおらかであり、一つの共同体としての温かい交流がありました。

今はその村も過疎が進み廃村の危機にあり、私の育った家も廃屋になり、既に、草の中に埋もれています。

自然は、かわりなくこの過疎の村にも四季を運んでくるが、かつてのように村人達の賑やかな労働の掛声や、祭りの歌声は、もう聞かれることはないでしょう。

故郷が寂れてなくなっていくのは悲しいことです。しかし、そこで過ごした子供のころの思い出や自然、季節の鮮烈な記憶は私の中で失われはしない。そして、私の原風景として、私の描く絵の中に、色濃く影を落とし続ける事でしょう。

(昭和31年 学芸学部2年制中学校中美術教室卒)



「疎林の春」



「冬」



「春」

直方谷尾美術館学芸員として

直方谷尾美術館学芸員

なかごめ
中込
じゅん
潤



私が勤めている^{のおがたに お}直方谷尾美術館は、福岡県の北部に位置する人口5万7千人ほどの町、^{のおがたし}直方市の中心部にある。江戸時代は城下町として、明治以降は筑豊炭田の要所として賑わったが、エネルギー革命とともに町は活気を失っていき、かつて西日本一の長さを誇ったアーケードも今はシャッターを閉じた店が多くなってしまった。そんな商店街の通りに面して、元医院を改装した小さな美術館が建っている。美術館周辺には大正から昭和初期の古い建物が点在し、それらが町の風景に独特の趣を与えている。

猛暑が続く8月上旬、二人の大学生が学芸員実習のため、美術館を訪れた。その内の一人は、この美術館に小学生の頃から子どもスタッフとして通っていた子だった。

子どもスタッフというのは、美術館に所属する子どものボランティアスタッフのことで、美術を通じて様々な活動を行っている。展覧会を企画したり、大きな旗を描いてアーケードを彩ったり、催しを企画して老人ホームを訪ねたり、活動内容は多彩でここでは紹介しきれない。朝日のびのび教育賞や、地

域創造大賞総務大臣賞といった全国規模の賞を受賞するなど、ユニークな取り組みとして度々注目を集めている。

「市民に親しまれる、とりわけ子どもに親しまれる美術館を目指す」という初代館長が打ち出した方針に基づいて生まれた事業は今年で12年目を迎えた。当初の方針は今も変わらない。子どもの頃にこの美術館で子どもスタッフを経験した子が、学芸員を目指して再び戻ってきてくれたことは、この事業を続けてきた職員にとっても大きな喜びであった。

子ども達が展示室の床に寝転んで作品の模写をしたり、作品を前にお話をしたりは、この美術館ではよく見かける光景。対話をしながら作品の世界を探っていく鑑賞は「おしゃべりあーと」と呼ばれ、学校で鑑賞授業を行うときの人気のメニューとなっている。美術館では工夫を凝らし色々な鑑賞の方法を提案している。



直方谷尾美術館の外観。
古い医院を改装し、美術館として親しまれている。



子ども達と対話型の鑑賞を行っている様子
(絵を指さしている大人が中込さん)

美術館で模写をする子ども達



美術館の子どもスタッフが描いた大きな旗がアーケードに飾られている様子

最近評判が良かったのは、暗闇での鑑賞。会場に設置した暗室内に立体作品を展示し、主に手で触れた感覚を頼りに鑑賞する。視覚が使えないことで、普段は意識しない感覚を刺激された人も多かったようだ。また、人間の五感を意識した鑑賞ツールとして作った「鑑賞のための七つ道具」も好評だ。作品の声や音が聞こえる聴診器や、作品の味がわかるスプーン、匂いがわかる糸電話などの道具（もちろん本当に聞こえたり、匂ったりするわけではない）が

詰まったセットで、これらの道具を想像のきっかけに使うことで作品の楽しみ方の幅が広がることが期待できる。こうした子どもを対象とした鑑賞をあれこれ考えていると、子どもも大人も関係ないように思えてくる。大人だって見方のバリエーションが増えれば楽しいものである。

もう少し鑑賞について考えてみる。作家とその作品を鑑賞する人との関係を、作り手から受け手への一方通行の関係として見ていた人は、割と多いのではないだろうか。ところが考えようによっては、その関係性は一転する。作家が自分のために作った作品を除けば、作品にはそれを見る人が想定されている。つまり見る人がいて何かを感じることで初めて作品が作品たり得る。言い換えれば鑑賞者も作品を形作る一人であると言える。

夏に実習に訪れたもう一人の学生と話した内容が印象に残っている。彼女は、複数の人たちと対話を重ねながら鑑賞する手法を大学で学んでいるのだが、この対話型の鑑賞の実践を重ねるうちに、自分の中にある偏見に気づかされることがあるという。

繰り返すが鑑賞者は受け手でもあるが作り手でもある。見る人の数だけ、作品は自在に変化する。世の中に溢れる様々な価値観が、ものの見方をいかようにも変えてしまうという事実を私たちは忘れがちである。そこに潜む面白さや危険性、自らの力で考える重要性に気が付いたとき、さらに自由に作品を見る事が出来るように思う。

（平成9年 人間社会学科国際社会文化研究コース卒）



美術館の子どもスタッフが、自分達が準備した出張展覧会のギャラリートークを老人ホームで行っている様子

地域における子ども支援

公民館における算数教室

しんかい ひで き
新開 英毅



数年前、地域の物的・人的資源を生かした子ども支援について学ぶ機会があった。平成25年度より2年間にわたる徳島大学大学開放実践センターの主催する生涯学習研究院でのことである。この講座は、一般社会人を対象に、「青少年健全育成」、「健康フィットネス」、「災害対策とICT」、「国際交流」の4領域について専門的な知識、技術を学び生涯学習・市民活動のリーダーの育成を目的とするもので、修了後は、市民活動支援士の称号が授与され、徳大まなび連の会員となる。私は青少年健全育成で学んだ。授業の一環として、平成25年10月に松山市立堀江小学校の地域住民との連携による教育活動の取り組みを視察した際に、公民館を活用した「通学合宿」を見聞する機会を得た。その活動から地域住民の子どもに対する熱い思いや、公民館は学校と違って子どもと地域住民との出会いの場であることを知った。そこで研究テーマとして公民館を活用した子ども支援を取り上げることにした。取り敢えず私に出来るものは何か、嘗て数学の指導主事をしていた頃、定時制高校の学校訪問で分数の足し算に躓いている生徒に会い算数の基礎力の不足を実感したことがあり、子どもを対象とした算数教室を開講してみようと思い立った。平成26年1月に渭東公民館を訪ね、中嶋修三館長、藤本繁主事にキッズカルチャー（算数教室など）の趣旨と地元小学校（福島小学校）の児童を対象にしたいとの意向を伝えた。お二人とも快く引き受けて下さった。特に藤本主事さんには、福島小学校の校長先生への説明を含め、学校を通した保護者、子どもへの案内、算数教室の運営などに多大なご協力を頂いている。

こうして、平成26年6月に算数教室を開講した。募集の条件として、塾に行っていない、算数の授業の分かり

にくい者とし4年生以上の6名が集まった。公民館は児童館を併設しており、そこに通う子どもが大半である。月に2回、放課後1時間30分ほどの学習である。宿題や教科書の問題をしているうちに、躓いているところを出るだけ丁寧に説明をすることを心がけている。希望者には、当方で準備している、教科書に添ったワークブック、基礎力養成の計算問題を与えたり、ゆとりのある者には、ハイクラスの問題を考えさせることにしている。平成27年度は13名の希望者がいた。3年目を迎える今年度は前年度の継続者が殆どで新規に募集はせず児童館に通う子どもを含め14名で行っている。教室は自学自習という形態を取り入れており、好きな時間に来て好きな時間に帰るという自由な雰囲気である。放課後子ども教室や学童保育と良く似た環境かも知れない。学校の延長線上と捉え子どもにとっての「良い居場所」づくりをと捉えている。

現在、地域における子ども支援として公民館以外の活動にも参加している。今年は11月3日の文化の日に、板野町の総合教育センターにおける「学びの丘フェスティバル」において、親子と一緒に学べる場として、徳大まなび連から、竹細工（竹とんぼ、竹馬、紙鉄砲、やじろべえ）の出版を、また、徳島県生涯学習インストラクターの会（私は会員の一人）でもマナビイ（生涯学習のマスコット）のお面づくりの遊びを予定している。研修会や実践発表会に参加するなどして各地で活動をしている方達との交流を深めている。こうした活動を通して地域住民と一体となった子どもの支援や地域に愛着を持つ子どもを一人でも多く育てることが出来ればと思っている。

（昭和41年 学芸学部4年制中学校課程数学教室卒）



算数教室の一コマ



問題集など

阿波九城の成立と終焉をめぐる

うやま たかひと
宇山 孝人



阿波九城は豊臣政権の城郭政策によって成立した。狙いは領内統治と外敵への備え、さらには統一政権への軍役奉仕にあった。戦国以来の古城を修築し、石垣のある近世城郭として蜂須賀家の重臣九人を置いた。

この阿波九城に関する研究は、第一次史料ではなく、幕末に編纂された阿波藩の公式年表「阿波年表秘録」（以下「年秘」）の記事を中心に行われてきた。そのため「年秘」の記事等を史料批判した上で、統一政権との絡みの中で考察する必要がある。

天正13年（1585）8月4日付の「豊臣秀吉朱印状写」によると、秀吉は領国支配の必要に応じて古城の破却や築城を勧め、蜂須賀家政の居城は渭山（徳島）に、大西（池田）、脇、海部、牛岐（富岡）は残して利用することを提案した。

その結果、渭山以外に大西、脇、海部、牛岐、撫養、仁宇山、川島、西条、一宮の九城が石垣を持つ近世城郭に作り替えられた。城番は与力や蜂須賀家の一門の中から一軍を統率できる実力者が選ばれた。

さて、慶長20年（1615）閏6月13日、大名の居城以外の端城（支城）の完全破却を求めた一国一城令が幕府から出された。同年は元号が元和と変わるため「元和の一国一城令」と呼ばれる。一国一城令は全国的には元和元年（1615）令だけだが、「年秘」には寛永15年（1638）の項にも、幕府から一国一城とする法令が出されたので、本城（大名の居城）以外の城を悉く破却したと書かれている。そのため、阿波藩の記録（「渭水聞見録」「御作法成来草案」等）には、元和令でなく寛永令により支城破却がされたと記述されている。また、最近の研究においても、阿波藩では、元和令と寛永令の2回、「一国一城令」が出されたと理解されている。何故このような理解がされているのか、解決

すべき課題である。

まず、元和令について検討する。「年秘」の元和元年の項に「大略破却」と書かれており、阿波藩では、九城を悉く破却しなかったようである。その理由として、蜂須賀蓬庵（家政）は、豊臣氏滅亡直後であり、有用な支城を残そうと考え「大略破却」と判断した可能性がある。また、城主としての誇りや独立意識、在地性へのこだわりなどがある城番に支城破却を納得させることが難しかった可能性もある。

次に寛永15年令の問題である。寛永15年の蜂須賀家文書「草案」によると、古城に一揆が立てこもって幕府の手を焼かせた島原の乱の教訓から、老中松平信綱が古城の堀や石垣等の破却、つまり完全な城郭の破棄を口頭で求めてきたとある。蜂須賀家は「元和の一国一城令」では不徹底な支城破却であったが故に、元和5年（1619）の福島正則の改易や将軍家光の強権的性格を考慮した藩主忠英は、幕府から「一国一城令」が出されたとして、支城の破却にとどまらず城番を徳島城下へ移住させた。この時、藩主忠英は松平信綱への破却完了報告が遅れた理由に、破却すべき石垣・堀があちこちに数多くあったことをあげている。なお、一宮城跡には現在も石垣が健在であることから、破却の実態は櫓などの建物破壊と堀埋めが主で、徹底した石垣破壊はされなかったと考えられる。

支城を破却するだけでなく城番を徳島城下へと移住させ、独立性の強かった城番（大身家臣）を蜂須賀家の中に組み込み、家老や仕置家老として領国経営の中核に据えた。これが阿波九城終焉の意味することであり、それがために、阿波藩で「一国一城令」といえば、寛永令と理解された所以でなかろうか。

（昭和47年 教育学部小学校課程歴史学教室卒）

Let's sports! Vol.7

体や健康、スポーツに関する
話題をシリーズでお届けします。

徳島大学女子ラクロス部の 活動について

社会創生学科公共政策コース4年
平成28年度 徳島大学女子ラクロス部主将 すぎの りお
杉野 里於



試合開始前のチア



得点后

皆さん、いきなりですが「ラクロス」というスポーツを知っていますか？

ラクロスとは、クロスと呼ばれる先に網の付いたスティックを用いて、硬質ゴム製のボールを奪い合い、相手陣のゴールに入れることで得点を競うスポーツです。フィールドの大きさは横110m×縦60m、競技人数は1チーム12人で行います。12人それぞれにアタック（AT）、ディフェンス（DF）、ミッドフィールダー（MF）、ゴールキーパー（G）の役割があります。ラクロスの特徴といえる

のがゴールの後ろもゲームエリア内だということです。つまり、ゴールの後ろでもプレーすることができます。ゴール後ろからのセットプレイは多くのチャンスを生みだします。それは他のスポーツにはないラクロスの見所です。また、速いパス回し、シュート、ゴールキーパーのセーブ、ディフェンスがアタックをゴールからうまく遠ざけるところなど、ゲーム展開が速いこともラクロスの特徴、魅力の1つです。

徳島大学女子ラクロス部は、2016年度現在、ブ

レーヤー30名、マネージャー3名の計33名で活動しております。ラクロスはカレッジスポーツということもあり、現部員全員が大学からラクロスを始めた初心者です。

私たちの主な活動内容は、4月に新歓、5月に中四国の1回生が集まって合宿をするフレッシュマンキャンプ、7月にサマー新人戦、8.9.10月に中四国学生リーグ戦、合宿、10月に学祭へ模擬店を出店、12月にウィンター新人戦、この他にも月1回の練習試合や、中四国の大学から選抜された選手が集まるユース活動等多くの行事やイベントがあり、充実した大学生活を送ることができます。

この多くの行事の中でも、部員が特に力を注いでいるのが、夏に開催される中四国学生リーグ戦です。2016年度徳島大学女子ラクロス部は、「中四国ファイナル出場」を目標に掲げ、週5日常三島キャンパス近くの総合グラウンドで日々練習に精進しております。

私たちは目標とは別に「挑戦」というテーマを掲げています。この「挑戦」にはファイナル出場への「挑戦」、プレー技術面での「挑戦」、行動面での

「挑戦」、今の自分を変えるための「挑戦」の4つの意味があります。現状に満足せず、常に「挑戦」していくことが目標を達成するために必要なことだと思います。目標を達成するためにはどうしたら良いのか、良いチームを作るにはどうしたら良いのか、ラクロスが上手くなるためにはどうしたら良いのか、部員一人ひとりが主体的に考え、行動し、時には部員同士で意見をぶつけ合いながら、成長しています。

私は、徳島大学女子ラクロス部に入部したおかげで、熱く真剣になれるものと出会い、また大切な仲間にも出会うことができました。

ラクロスは、まだまだマイナースポーツではありますが、少しでも興味を持っていただけたら幸いです。もし、練習や試合を見学したい方がいらっしゃいましたら、是非お越しください。

最後になりましたがこの度徳島大学渭水会々報に寄稿できる貴重な機会を与えてくださり、誠に感謝しております。

最後まで読んでいただきありがとうございます。



Sport Policy for Japan 2015大会

人間文化学科心理・健康コース4年 ^{とよだ まみ} 豊田 真実

「大学生っていいな。戻れるなら戻りたい」大学での出来事を親に話すとよくこう言われます。やりたいことがあれば時間も体力も、大人の方の指導や支援を受けることが出来る。これこそ学生の特権であると私は考えます。

今回私はスポーツ経営学研究室の行實先生から誘いを受け、坂本直也さん、川口新さん、池田瑞姫さんと共に徳島大学ウェルネスチームとして2015年11月28～29日に東海大学高輪キャンパスで開催された笹川スポーツ財団によるSport Policy for Japan 2015大会に出場し、優秀賞を受賞しました。

Sport Policy for Japan (以下SPJ) とは、全国の大学3年生を対象に行われる、スポーツ政策のプレゼン大会です。提言先や実現させるまでの過程をしっかりと発表しなければならないのが、この大会の難所であり、醍醐味でもあります。

私たちのテーマは「ゆるスポーツが世界を変える」。ゆるスポーツとは世界ゆるスポーツ協会の代表澤田さんが設立したのが始まりで、子どももお年寄りの人も、障害のある人も、スポーツが苦手な人も、誰もが楽しむことできるように工夫されたものです。私たちはSPJに出場するにあたり、自分たちで新たなゆるスポーツを考え出すことにしました。そこで誕生したのが「OUR合戦」です。「OUR合戦」は雪合戦を基盤としており、雪玉の代わりに軽いボールを使用します。ボールが当たるとその場で「阿波踊り」をし、緑色の「スタチボール」を味方に当ててもらおうと復活するといったような徳島の要素を組み込み、「OUR合戦」に阿波の意味も掛け、地域活性化に繋がればと考えました。また、「OUR合戦」の一番の特徴はルールを書き換えることができるという点です。私たちは徳島の地域を活かしたモデルを作成しましたが、他の地域の特色に当てはめたり、子どもに合わせたりと自分たちに合ったルールを当てはめることができる変幻自在なスポーツです。



SPJの決勝プレゼンテーション

他にも私たちの工夫やこだわりが沢山ありますが、この「OUR合戦」のねらいは、多くの人にスポーツの楽しさを知ってもらうことでした。スポーツ離れを防ぎ、人生を歩んでいく上で生涯ずっとその人の隣にスポーツがあってほしい、「OUR合戦」がそのきっかけになれば、という期待を込めました。そして、スポーツの新たな価値に気づくことで皆さん自身の世界、いわばmy worldを変えることができるのではないかと考えたのです。



優秀賞受賞メンバー(左から坂本、川口、池田、豊田)

28日に行われた予選では上位3チームに選ばれ、29日の決勝に進出することができました。プレゼンがどうだったかと聞かれるならば、たった一言、とにかく楽しかった。あのような大きな大会で審査員の方や、他大学の方に自分たちの伝えたかったことが伝わっているという感覚は忘れられません。もちろん「OUR合戦」を考える過程には様々な壁が私たちの前に立ちました。何度も話し合い、実践と改善を繰り返し、納得がいかず振り出しに戻り最初からやり直したこともあります。考えを実現させることの難しさを突きつけられました。決勝での発表はその苦労が全て報われた瞬間でした。惜しくも最優秀賞には届きませんでしたが、味わった達成感が、私たちは100%の発表ができたのだということを証明しています。悔しい気持ちもあります。けれども、この悔しさは成長の糧に繋がっていると私は信じています。

このような光栄な賞を頂けたのは、沢山の方の支えがあったからです。徳島新聞社様、世界ゆるスポーツ協会様、実践の場を設けて下さった皆様、SPJ関係者の皆様、この場を借りて感謝申し上げます。そして、このような機会を与えて下さり、ずっと付きっきりでご指導して頂いた行實先生には大変お世話になり、感謝してもしきれません。行實先生の期待に応えることはできませんでしたが、同じ目標に向かった過程を先生と一緒に共有できたことを嬉しく思います。

SPJを通して、まだまだ私の周りには私が気付いていない支えが沢山あると実感しました。そのことを忘れず、このような貴重な経験を今後に関し、残された学生生活を過ごしていきたいです。



|エ|ッ|セ|イ|

卒業からその後



なが おか
長 岡 さやか (旧姓 青木)

卒業後、読売新聞に入社し、記者として全国各地の現場を駆け回ってきました。2012年には、双子の男女を出産。昨年春に職場復帰して、いわゆる「ワーキングマザー」として、忙しい毎日を送っています。

夫（大学時代から交際、その後、ゴールインしました！）とは、お互いの仕事の都合で離れて暮らしていますので、ほぼ一人で育児、家事をこなしながら記者を続けていることになります。「どうやって両立しているの」「どうしてそんな難しいことが可能なの」と驚かれることが多いのですが、学生時代の貴重な経験のおかげだと思っています。

2006年夏、私は総合科学部と学術交流提携を結んでいる中国・武漢大学に短期留学しました。同大学で開かれる「インターナショナル・サマープログラム」に参加するためです。これは、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ合衆国、オランダ、韓国など、各国の学生が武漢大学に集まり、同大学の講義を受け、学生たちと交流する行事です。授業がない時には、街に出かけたり、小旅行したり。色んな背景を持つ学生らと交流し、様々な議論をする毎日の中、「世界にはこんなに立派な若者たちがいるのに…」と、悔しい思いをしました。政治的な立場から国を追われ、家族と亡命した学生や、生まれながらに多重国籍で多言語を操る学生——。武漢大学の学生らは3畳ほどの学生寮で共同生活をしており、「海外に留学したこともない」と言いますが、私よりも英語も堪能で、キラキラした瞳で夢を語ったのです。

中でも忘れられないのは、同大学の男子学生に「日本の女性は どうして子どもができたなら仕事をやめてしまうの」と聞かれたこと。私は「日本のサラリーマンは長時間労働が前提。子どもがいたら、女性は大変で続けられない」と答えたのですが、「女



武漢大学留学時写真

性も経済的に精神的に自立しないと、国も、家族も、誰も、君を守ってくれない。中国人の女の人はみんな働

いている」と話し、「お金をかけて、大学で難しい学問を学んでいるのに、より多くの人のために使わないともったいないでしょう？自由を得るためにも、自分の好きな仕事を続けられるように、頭を使って工夫をするんだよ」と諭されたのです。

このプログラムで寝食を共にした仲間の中には、それぞれの卒業後、国際弁護士として平和活動に邁進する香港の男性、アメリカでニュースキャスターになった中国人の女性、国際的なバンカーとして世界中を飛び回るオランダ人の男性らがいます。彼らとは今でも連絡を取り合っているのも、活気ある近況を見聞きするたびに「負けられない」とたびたび奮起するのです。私の原動力となっています。

私の日々の様子を少しだけご紹介しましょう。少し早めの午前5時頃に起きて、家事や保育園の準備をすませ、8時には子どもたちを園に預けます。その後、仕事開始。インタビュー、写真撮影、執筆を素早くこなし、午後6時までにはお迎えに行きます。帰宅後には、家事の合間に送られてきた紙面をチェックします。午後10時頃には子どもに絵本を読みながら一緒に就寝することが多いです。インターネットやテレビを見過ぎないなど、うまく時間を使うようにして、何とか自分のやりたいことを全てできる生活を整えてきました。少し大変な時もありますが、母親の目線で書いた記事などが若い読者の人々から喜ばれることも多く、家族も応援してくれて、毎日が充実しています。

希望が叶って、今秋からは、大阪本社の文化部で働くことになりました。小さな一歩ですが、大学時代からこつこつと続けてきた声楽やピアノの知識などを生かして、音楽の記事を書くのをとても楽しみにしています。

武漢大学への留学以外にも、イギリスへの短期留学、20周年記念として、ノンフィクション作家で評論家・柳田邦男さんとの鼎談^{ていだん}など、貴重な経験をさせていただきました。

在学生の皆様や未来の総合科学部生の皆様が、私の大切な母校で、よく学び、よく遊び、大きな夢を描いてくださいますよう、卒業生の一人としてエールを送ります。

(平成19年 人間社会学科国際文化コース卒)



|エ|ッ|セ|イ|

歌と共に

やま もと れい こ
山 本 鈴 子



この度思いがけず、渭水会の濱田先生から、渭水会会報への投稿のご依頼を受け、一度はお断りしようと思いました。卒業以来60余年家庭に入ったままの私に、何か書けることがあるのかしら?と考えてみました。振り返ってみますと、副専で音楽科を選んだことで、自分を見失うことなく今に至っていることに気付き、お引き受けました。

音楽教室のどの授業も好きな事だけに、とても印象に残っています。主任教授だった近藤良三先生には、目をかけていただきたくさん事を教えていただきました。

授業では音楽理論全般について学び、作曲や発声の厳しいご指導が今も生きています。

先生は、当時NHK徳島放送局の合唱団の指揮を担当しておられて、入団を勧めていただき、入団致しました。

当時は生放送であり、それは緊張しましたが、近藤先生のご熱心な指導と名指揮で、緊張もときほぐされ、歌う事を楽しんだように思います。何回も放送したのですが、何の曲を歌ったのか、曲名が思い出せないのが、惜しまれます。それが豊かな精神的な支えになって今日に至っております。

卒業後、主専に家政科を選びましたので、家庭科職業 音楽教師として、徳島市津田中学校に一年九ヶ月勤務の後、結婚して家庭に入りました。一男一女に恵まれ、主人の転勤に伴って十数回位の転居を経験しました。

子供達も転地と新しい学校に慣れるまでは、それなりに大変な事でしたが、私にとりましても、新しい土地で生活を始めることは、それは容易な事ではありませんでした。どんなに辛く厳しいときにも、前向きに心の中で好きな曲を歌いながら、新しい土地の文化や歴史に触れ、良い友人、知人に恵まれ乗り越えてきました。

その後東京に転居して、待望の合唱団に入団し、いよいよ私の生き甲斐とも言える歌う事が始まりました。

その後、村谷達也先生のご指導で楽しい中にもそれなりに努力を積み重ね、次第に上達を実感するまでになりました。

昭和60年12月、日本人では初めての出演でした。

村谷達也先生のご指導の下、ウィーン楽友協会で、

ベートーヴェンの交響曲第九番の合唱を歌う機会に恵まれました。当時の文化放送のスタジオをお借りして、原語の発音等厳しいレッスンを頑張りました。本番を迎えて、それは筆舌に尽くしがたい歓びと感激でした。

日本人として学友協会で初めての演奏会でしたので、それだけに私にとりましては、生涯の素晴らしい記念すべき事として、心に残っております。

その後、村谷先生のご指導でポーランドで、大学と交流する機会があり、当地で四合唱団の中から30余名で日本の歌曲を中心に、演奏会を開きました。

観客の皆様から暖かい拍手を頂き、頑張ってもう一度に、達成感と歓びで一杯になりました。

女声合唱団に参加して30年余り、歌う楽しみを存分に感じて参りました。そしてその後ずっとピアノ伴奏をして頂き、心から信頼できる田中梢先生は、掛け替えのない存在となっております。

現在、自宅のホールで田中梢先生をお迎えしてグランドピアノを囲み、それぞれに個性豊かな仲良しの4人のお友達と、主にイタリア歌曲、日本歌曲等楽しい練習をしております。歌う事が大好きと云っても、現在の歌える環境を作ってくれた家族の協力なくしては成り立ちません。この機会を借りて感謝したいと思います。

思い起こしますと、一貫して歌う事だけは忘れなかった。人生の原点は、大学で学んだ事が、今生かされていると思っています。今も心から感謝の気持ちで一杯です。

(昭和30年 学芸学部4年制中学校課程家政学教室卒)



1985年頃の演奏会にて



|エ|ッ|セ|イ|

草創期の恩師を偲んで

やま だ ひで お
山 田 秀 雄

井上忠義先生はヨーロッパ史で中世後のルネッサンスやピューリタン革命、フランス革命あたりを教えて下さった。先生の「ルネッサンス」とか「レットルドキャッシャー」、そして「それはだな、その一なんだな…」などという特徴のある言い方を面白がっていた丈^{だけ}だったのは今更ながら誠に申しわけなかったと思う。

「君たちはだな、毎時間講義を聴いてノートに書く丈でなしに、その知識を基本にして何とか外部へも発表して行かんとなあ……」とおっしゃった。

あの算盤と万年筆の時代にそんな洒落た言い方はまだなかったのだが、多分「情報は発信してこそ値打ちがある」という意味で言われたのだと思う。

「史学教室の連中はよう勉強しとてなあ、本でも書こうかという勢いでおる。君らもそこらように考えてみんとなあ」先生はやはり発信することの大切さを強調されていたのだった。

そう言えば、シェークスピアの作品に倣ったと言われるエリック・シーガルの青春小説『Love Story』（ある愛の詩）の冒頭で大学生のオリバーが女子大学の図書館にホイジンガの「中世の秋」を借りに来てジェニーと出逢う場面があった。史学専攻生にとってはそれが必須の書物らしいことを示唆していたように思われる。

井上先生の励ましを今頃になって頂いた形で、そのオランダの史家ホイジンガの「中世の秋」の各所にヒントを求めつつこの機会に未だ中世の余香の残るイギリスの「中世の秋」を探ってみたいと思う。

1666年：ロンドン橋とその周辺

17世紀の半ば過ぎ1666年、ロンドンに大火があった。

8月も半ばを過ぎるとイギリスではもう冷ややかな空気を感じる日があり、9月になれば日中は暑くとも夕方はもうすっかり秋の気配を感じるそうである。

その9月も2日になったばかりの午前2時頃、ロンドンの一角に燃え上がった劫火は4日4晩も続き、旧市内の殆どを焼き尽くしてしまった。いわゆ

る“ロンドン大火”である。その火災のあらましはこうである。

王室お抱えのパン職人の家のかまどの火が近くにあった薪束に燃え移ったのが原因であった。火元はロンドン橋の通りのすぐ横、その名もプディング横丁にあったのだが、タール塗りの木造家屋がぎっしりと建て込んだ小さな路地はひとたまりもない。そして丁度乾燥した日が続いた日曜日、人々がぐっすり寝込んでいた所を北西の風にやられたわけである。

火元のパン職人と妻そして娘や使用人は屋根を伝って難を逃れたが、住込みの女の子はその屋根に登るのが怖くて遂に初の犠牲者となった。焼失した家屋は1万3千2百、焼け出された人は10万人。セントポール教会をはじめ84棟の教会と44のホールが失われたと言うからその規模の大きさが偲ばれよう。

4日後の木曜日の朝には全市の僅か6分の1を残すのみという悲惨な結果になったが、丁度ロンドンをS字形に縦断するテムズ川が幸いして南岸側は難を免れることになった。しかしこれとて、当時唯一の橋であったロンドン橋を燃え渡らんとする猛火を決死の破壊作業と消火活動とで、橋の北3分の1の部分で食い止めた市民の働きがあったからである。

この大火の記念碑として1677年に石造りの塔が建てられた。場所はロンドン橋の近くである。高さ約61米、この長さはそこから出火したパン屋までと丁度等しい距離に当たると一般に考えられている由である。

テムズ川に最初の石橋が僧侶たちによって架けられたのは13世紀の初めであった。橋の上の屋根付きの歩廊は既にあつたらしく、町並みのように両側に店が並んでいた。橋の中ほどには礼拝堂があった位だから現在で言うアーケード付きの商店街といったところであろうか。木造なので何度も焼け、作り直すごとに大きくなり、16世紀頃には百軒もの店と住

宅が橋の上に並んでいたということである。

古いロンドンを写生した絵も色々に残っていて、その中で最も詳細でよく知られたものはヴィッシャーの署名のある「1616年のロンドン」であろう。

テムズ川をはさんで南岸から向こう側、つまりCityを一望にやや俯瞰したもので、下流の東側はロンドン塔から、西はテムズ川が南へ直角に曲がろうとする迄の直線部分約1.5kmを写生した銅版画で、この中にロンドン橋が正確に描かれている。

その南岸から橋にかかる地点に棒付き飴のようなものが20本ほど乱雑に立てられてあるのが見える。どうやらそれが槍に刺した人間の頭であることがわかる。詩人のW. スコットの註によれば、それらは死刑になった反逆者たちの晒し首だということである。常に清教徒やスコットランドの革命にさらされ、議会との権謀闘争に明け暮れた王の権力を支えたものはこうした恐怖と示威の力であったのであろう。

テムズ川は以前から木製の橋があり1014年に壊れて落ち込んでから1176年になって石造りの橋にしようということになったらしい。

潮の退いた頃を狙っては木製のパイルを、水流を避けるために船形に打ち込み、その中に石垣を精密に積み上げて橋脚とし、そのスパンの上にやはり花

崗岩をアーチ形に築いていくといった大工事であった。橋脚だけでも19基。そのために実質的な水流の幅が4分の1に狭められ、潮の圧力を一層強く受けて予想したよりも難工事となってしまった。

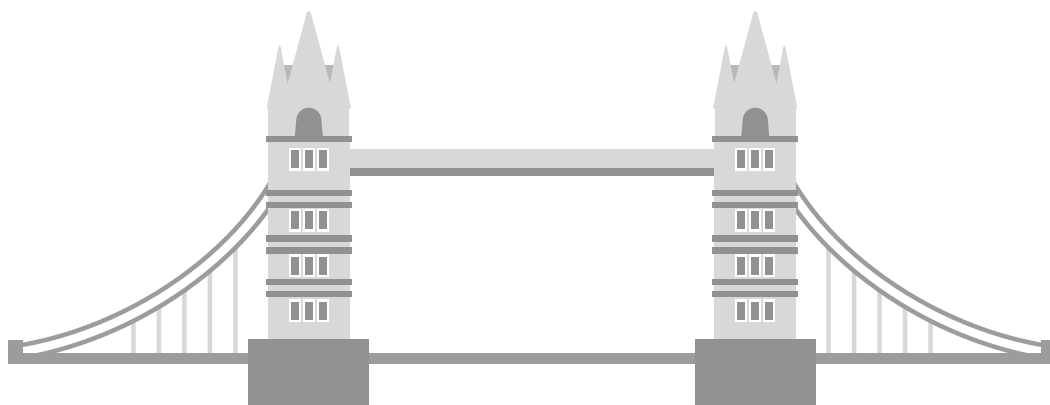
この橋はその後600年に互りロンドン市民を益してきたわけであるが、1756年に少しづらして広げたが市の発展に追い付かず結局作り替えることになり、ジョン・レニーなる技術者の設計によって、又その遺志を継いだ2人の息子によって父の死後10年経た1831年全く新しい橋がその上流側に出来上がった。スパンが5つある最近の橋である。

1968年（昭和43年）このロンドン橋が取払われたということがニュースになった。いずこもおなじ交通量の増加で10米余の車道は手狭になったのと、数十年来、年間4ミリほどの沈降が続いて安全な維持が絶望的になったからであった。そしてその橋がアメリカへ身売りをするようになったわけである。

（昭和28年 学芸学部4年制中学校課程音楽教室卒）

【お詫びと訂正】

第44号P33 山田秀雄様の原稿の中で、「…御家族を伴われて渡来された」とありましたのは、「田村孝行先生は御家族を伴われて渡米された」の誤りでした。ご訂正申し上げますと共に、深くお詫び申し上げます。



スタートライン

S T A R T L I N E

今しかできないこと

京都大学大学院 工学研究科 創成科学群 高分子化学専攻 高分子制御研究室 はやし としき 林 俊輝



研究室風景

私は、平成28年3月に徳島大学総合科学部総合理数学科物質総合コースを卒業し、4月からは京都大学大学院で高分子に関する勉強をしています。徳島大学を卒業して4か月しか経っていませんが自分を取り巻く環境は大きく変化した、この短期間に数多くの刺激を受けました。

大学生活を振り返ると、徳島大学で過ごした4年間は私の貴重な財産であり、これからも忘れることのない思い出です。大学を卒業して他大学の院へと進学したからこそ思うことはたくさんあり、その中で学生のみなさんに伝えたいことは大きく分けて二つあります。一つ目は、人とのつながりを大切にしたいということです。私がこうして他大学の院への進学を決めたのも大学時代の先輩や友人の影響が多くありました。大学ほどたくさんの人と出会うことができる場所というのはほとんどありません。その中には自分と合う人、合わない人がいるとは思いますが自分の視野を広げるためにもできるだけ多くの人と関わってください。このことこそが私は自分を成長させる一番の近道だと思っていますし、現在でもできるだけ多くの人と関わりを持つため日々

努力しています。

二つ目はいろいろなことを経験して欲しいということです。大学院に進学して思うことは学部時代とは異なり、自分のやりたいことをする時間が限られているということです。自由に時間を使えるというのは学部時代の特権です。だから、学部生の皆さんには、できるだけ多くの経験をして欲しいと思っています。時には無駄な時間を過ごしても良いと思います。私自身、他の人から見れば、無駄と思われるようなことをたくさん経験しましたが、今ではそれも話題の種となっています。皆さんには後から後悔をして欲しくはないので自由な時間があるうちに多くの経験をして欲しいです。

現在私は、京都大学大学院で高分子の勉強をしています。私はこの4か月で多くの刺激を受けました。皆さんは京都大学と聞くとどのようなイメージをお持ちですか。私は、全国から優秀な学生が集まっている学校というイメージでした。そのため、入学した後、勉強についていけるのか不安がありました。しかし、実際に入学してみて感じたことは、学部時代とあまり変わらないという印象です。大きく違うことというのは、私の今いる研究室には外国人の方が多くいるので嫌でも英語を話さなければならないということです。私は、恥ずかしながら、英語が中学生の頃から大の苦手であり、英語という科目を避けてここまでの人生を生きてきま



研究室仲間との旅行

した。しかしこんな私でもこの4か月で少しではありますが研究室の外国人の方とコミュニケーションをとれています。語学は慣れと語学ができる人は良く言いますが、私の様な人でも少しずつではありますができるようになっています。だから、私の様に語学に苦手意識がある人でも諦めずに勉強を続けていって欲しいと思います。

最後になりますが、私は他大学に進学したことを一切後悔していません。しかし皆さんに勧めるわけではありません。他の大学院で勉強することも一つの選択肢としてあるということを知ってもらえれば光栄です。ここまで読んでいただきありがとうございます。

(平成28年 総合理数学科物質総合コース卒)

目標に向けて

徳島大学大学院 総合科学教育部臨床心理学専攻 修士1年

なかしま まき
中島 真希

私は平成28年3月に徳島大学総合科学部を卒業し、現在は臨床心理学を専攻しています。大学生活を振り返ると、楽しくもあり苦しくもあり、様々な経験を通して充実した4年間を過ごすことができたように感じます。

私は大学に入学した時から教員免許の取得を目指していました。心理学を学び、大学を卒業したら学校現場で生徒の悩みに寄り添える教師となることを目標としていたためです。しかし学部3年から4年に上がる頃、専門である心理学をもっと学び、相手の話を聴くことができる実践力を身につけてから現場で働きたいと考えるようになりました。金銭面の悩みもありましたが、兄弟の支えもあって院進学を決意することができました。自分の意志で金銭面に影響を与える大きなわがままを通してしまったのは、初めてかもしれません。父の許しを得て進学を決意してから入学試験までの期間が短く、その間に教育実習もあり、卒業論文にも追われ、4年の春から夏までは特に忙しい時期であったように感じます。勉強時間の少なさから入学試験に本気で落ちると思っていましたが、合格を確認できたときは感極まって泣きそうになりました。

新たなスタートから半年が経ち、ボランティア活動やアルバイト等、現在は想像以上に忙しい毎日を過ごしています。学部の頃から週1回通っている適応指導教室のボランティア活動は3年目になりますが、心理学と教師を両立させるために学ぶことの多い、私にとっては理想の環境です。不登校児童生徒のためにボランティア生として私にできることは何があるのか、相応しい立ち居振る舞いはどのような

ものか悩み、そしてそれを実行に移す難しさを毎週感じています。

学年が上がるにつれて、やはり私が目指している教師像は非常に難しいものなのだろうと実感するようになりました。私の課題は恐らく「臨床心理士に求められる言動と教師に求められる言動の使い分けができるようになること」です。現在は臨床心理学を学んでいるため臨床心理士に求められる言動を行うことが多いですが、このまま指導・教育的発言を抑える心理学に染まると、教師になった時に生徒を注意したり指導したりすることができないように感じます。心理士と教師の両立が難しい道であることは予想していたことですが、今まで一心不乱に目指してきた教職に対する不安も生まれてきました。教師になることを最終目標に置き、自身の能力を成長させるために進学したはずが、いつの間にか修了後の進路に悩むようになっていました。

このまま心理職に就いてしまおうか。しかし本当にそれで私が目指していることが達成できるのか。今この環境で学ぶことを許してくれた両親の気持ちを無駄にしないためにはどうすれば良いのか。この数ヶ月悩んだ結論は、今はこの環境で学ぶべきことを学び、無事修了することを目標として、それに向けて精一杯生活するということ。2年後にどのような進路に進んでいるかはまだわかりませんが、その時その時真剣に考えた結果がきっと自分を成長させると信じて、短い、けれど充実した院生活を満喫していきたいと思います。

(平成28年 人間文化学科心理・健康コース卒)

新たなスタートライン

徳島大学大学院先端技術科学教育部システム創生工学専攻知能情報システム工学コース

さこぐち ゆ か こ
山口 有香子

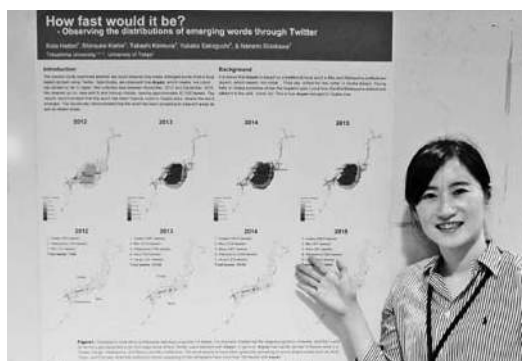
私は、徳島大学大学院総合科学教育部で日本語学の分野の方言学を専攻し、2013年4月から、総合科学教育部に入学と同時に日本学術振興会の特別研究員（DC1）に採用されました。研究テーマは、「GISによる言語地理学研究－瀬戸内海地域をフィールドとして－」です。2011年から現在までの間に通信や面接による調査を行い、瀬戸内海の島嶼部や沿岸地域にお住いの約1,600人の方々から方言の資料を収集することができました。GISを用いた言語地理学研究は、まだ着手されたばかりの分野ですが、GISを利用した方言の分析は、今後、言語地理学を進展させる大きなきっかけとなるに違いないと思います。また、方言学の分野に地理情報科学・空間情報科学を導入することによって言語と社会の関係を詳細に分析できると考えています。複合領域から得られた研究成果を人文諸科学の発展のみならず、広く社会にも還元する－こうした新しい取り組みが今、求められているのです。

現在、日本語学研究室の共同プロジェクトの一環として奄美大島における言語地理学的研究を行っており、2012年から奄美大島に7回訪れました。縁があり、FM奄美のラジオ番組に生出演し、徳島大学日本語学研究室の取り組みについてお話をさせていただきました。大学院に進学して以降、日本各地を訪れる機会が増え、今後は研究のフィールドを全国に拡大していきたいと思っています。総合科学教育部には、研究環境が整備され、GISを専門とする教員が複数在籍しています。こうした点からも、研究に着手できる準備が十分に整っていました。

2016年3月徳島大学大学院総合科学教育部博士後期課程を修了し、学位（学術）を取得しました。今年4月からは、同大学院の先端技術科学教育部システム創生工学専攻知能情報システム工学コースの博士後期課程に進みました。私は、これまでも方言資料のデータベース化に取り組み、その成果とGISの分析技術を用いた研究を博士後期課程で実践してきましたが、方言衰退の実態や言語伝播のパターン解明については、工学的な手段、例えばテキストマイニングや人工知能技術が要求されていると感じています。大量の方言データを包括的に分析するツールとして、アドバンスト知能を用いた言語研究といった新しい方法論を確立するとともに、方言コーパスを活かし知的医療診療システムに応用する手法を研究・開発を目指したいと考えています。具体的には、医療・看護・福祉の現場で、高齢者が使用する地域の方言を誰もがスムーズに理解できるようにするため、方言コーパスの構築を行い、誰でも気軽に利用できる、アプリ型医療診療システムの構築をしたいと考えております。さらに、その応用として方言で話す会話ロボットの開発を実践したいと考えています。

目標とするのは、言語研究という学問的な分野への貢献を目指すことと、もう一つは複合領域における人文社会、知能情報工学等の諸分野の融合した研究の実現を目指すことです。同時にまた、広く社会貢献にも寄与し、人文諸科学を追及する研究者になるのが私の当面の目標です。今後は、この目標にむけて努力していきたいと思っています。

（平成28年 総合科学教育部地域科学専攻博士後期課程修了）



2016NWAV-AP4発表にて

徳島市退職校長会 講演会・祝賀会

み まき ちづこ
三 牧 千鶴子

徳島市退職校長会は、会員の研修と相互の親睦を図り、併せて本市の教育振興に寄与することを目的として活動しています。特に、教育振興に寄与するための社会的活動として「子ども歩き遍路ツアー」を主催し、徳島が世界に誇る文化遺産に触れるとともに、子どもの体力向上を図るべく活動してきました。

今回、会員の研修と親睦を図るために、一般社団法人 国際女性教育振興会理事である井上正子氏を講師にお招きし、「講演会・祝賀会」を開催しましたので、ここにご報告いたします。

講演会

- ・日 時 平成27年12月6日（日）
- ・場 所 ホテルグランドパレス徳島
- ・演 題 海外研修報告
「アウシュビッツ・ビルケナウを訪ねて」
- ・講 師 井上 正子氏
(一般社団法人 国際女性教育振興会理事)
- ・講演要旨

アウシュビッツとは、ポーランド国内での地名“オシフィエンチム”のドイツ語読み。ポーランドへの侵攻後国内が徐々にナチスドイツ一色に塗り替えられていった。このアウシュビッツは、ヨーロッパ中から集められた大量のユダヤ民、ロマ（ジプシー）、同性愛者、ソ連軍捕虜などが送り込まれ、大量虐殺の場と化した。現在は、国立博物館として復元整備され、惨劇を伝える世界文化遺産である。収容棟内の展示室では、当時の悲惨な状況を示す写真の数々や「食餌」のサンプルなどを見たが、中で



講演会のもよう



叙勲・受賞された4名の方のお祝いをしました

もショックだったのは収容者から取り上げた衣服、靴、眼鏡、鞆、義足、杖、コルセット等々のおびただしい量！これらの持ち主は



井上正子氏

収容所に着くや、労働力に値せずと選別され即、ガス室送りとなった人達である。また、ガス室とおびただしい量の髪の毛の部屋は、写真撮影不可であったが、心には重く焼き付いた光景であった。

アウシュビッツでは、加害者も人間、被害者も人間。人間の残忍さ、非情さ、極限状態での人間の生き様など、重くて答えの出ない課題を貰ってきた旅であった。

(昭和45年 教育学部小学校課程地学教室卒)



講演会のもよう

徳島大学地学教室研修会・同窓会

やま ぐち よし こ
山 口 由 子

- ・ 日 時 平成28年1月4日（月）
- ・ 場 所 ホテルクレメント徳島
- ・ 研修内容

地学教室では、毎年研修会・同窓会を開いています。県内外の会員が集合し、専門分野の発表や研修を行っています。今年は1月4日（月）に実施し、名誉教授の岩崎正夫先生や副手の平岡五十鈴さんも素敵な笑顔を見せてくれました。同窓会会長の東明省三氏は句歴25年の集大成で発刊された句集『里山』の作品紹介と言葉の魔力を語りました。3月に東京工大教授を退官する丸山茂徳氏は、文科省のWPIプログラムの支援で設立された地球生命研究所で活動を続け、生命と地球の歴史に科学者としての誇りと尊厳をかけて今後も挑んでいくと抱負を述べました。

定年後徳島に戻った方や、海外や国内で様々な理科教育のボランティアに携わっている真鍋憲昭氏らの近況報告など懐かしい顔と新しい顔の出会いが今年もありました。

毎年5月にストーンフェアを開き、岩石鉱物の魅力を発信している岩崎正夫先生は、庵治石の特徴と住職と相談して自ら考えた戒名“青岩院文教日正居士”完成までの経緯をユーモラスに話されました。学生時代にタイムスリップしたように和やかで活気に満ちたひとときでした。

岩崎先生は3月30日（水）午前、元気に岩石標本の整理をし、午後は文化財保護審議会に出席しまし



岩崎正夫先生
愛媛県関川巡検にて(2011年11月8日撮影)

た。夕方突然に救急車で運ばれ、3月31日（木）黄泉の国に旅立たれました。生涯岩石学の研究をしたという願いは叶えられました。1953年に徳島大学学芸部助手に採用され1988年、総合科学部教授退官までに多くの学生を指導されました。2006年には、広域変成岩の先駆的研究とオフィオライトの先見的研究等で優れた地質岩石学研究者に贈られる名誉ある「渡邊萬次郎賞」も受賞しました。世界的に素晴らしい研究成果を残された先生は私たち教え子にとって大きな拠り所でした。

今宵は中秋の名月。岩崎先生はかつて中川衷三先生の弔辞で「衷やん、あの世というものがあるなら、今度はあの世でうまい酒を飲もう。」と呼びかけられました。今頃、おふたりは天国で再会し、美味しいお酒を酌み交わしていることでしょう。

（昭和51年 教育学部中学校課程地学教室卒）



渭水会 教育課題研究会

おく むら よし お
奥 村 兆 男

教育課題研究会は、現代の教育現場の様々な課題を幅広く取り上げ、各種の講演会や研究会に参加し、その内容について感想や意見を述べあい、教師力の向上を目指す研究グループです。

今回は、平成28年8月3日（水）に行われた「個と集団の学び合い」に関する講演会をテーマに話し合いました。

当日の講師は、東京藝術大学の佐野靖教授で、演題は「感性をはぐくむ教育」とありましたが、音楽指導にとどまらず、現在の日本の教育の課題について、様々な角度からお話をいただきました。

講演内容の骨子は、次のとおりです。

- (1) 東日本大震災の被災者が求めたのはまず水、次に正しい情報、三番目は…
- (2) 自分が変わる＝他者が変わる
- (3) 十人十色、でも十人は一色
- (4) ふるまい＝振（与えられたもの、おしえられるもの）＋舞（自己表現）
- (5) 基礎・基本とは？
- (6) 「表現の工夫」を深め、「表現の技能」を高める
- (7) 「聴くこと」「聴き合うこと」がコミュニケーションの原点
- (8) 「アクティブ・ラーニング」を考える
- (9) これからの教師に求められる専門職性
- (10) 開かれた心で音楽に向き合うこと
- (11) 常に「手段」と「目的」を厳しく問い直すこと

その中で特に心に残ったお話として、長野県のある中学校の実践の紹介がありました。その中学校のスローガンは「十人十色、でも十人は一色」というものでした。その解釈は、「個と集団のかかわりにおいて、集団で協働的に学ぶからこそ一人一人が生きてくる」ということでした。青山学院大学の佐伯胖教授によれば、氏は「主人公化」という言葉を使い、「いろいろな人と関わることを通して生まれてくるもの、共同的に出し合う、あるいは共同的に可視化される、つまり『主人公化』されるということが大切になってきている」と説明しています。また同時に、教師が豊かな言葉で「一人一人のよ

さ」を評価することで「主人公化」されていくと指摘しています。

佐野靖教授が述べる「共創」とは、

複数の人間の相互作用を通じた創造性を意味していますが、この「共創」こそが学



校の存在意義ともいえるもので、「そうした集団の学びから自分で選択できる子どもが育ち、学び合う中で他者への思いやりが生まれ、そして、感動が生まれてくる」と熱く語られました。

講演会後の情報交換では、会員から、次のような意見が出されました。

- ・佐野先生の実践に基づいた説明は大変リアリティがあり、わかりやすかった。教育を実践していく上で今回の講演は、自分たちの教育の方向性の整理につながったと思った。
- ・「みんなちがって、みんないい」の言葉に代表される個性尊重とは、個をバラバラに切り離してしまっただけのことではないと改めて思った。
- ・「みんな、自分の考えを持ちなさい」は事の終わりでなく、事の始まりだと思う。自分のしっかりした考えや意見を持つことを出発点に、みんなが意見を出し合って、知恵を出し合って、もっといい考えはないか、もっといいやり方はないかと探し求めていく。その時、「個」を足場にした「共同」が生まれ、一段と自分が高まり、集団も高められていくと考える。
- ・個を出発点に、知恵を出し合い、考えを深め、「共同」へと高めていく過程が、「話し合い」にはかならない。「個と集団の創出」こそが課題であり、今日の教室で期待されていることであると考えます。

教育課題研究会では、今後も、しっかりと会員の資質向上を図っていききたいと思います。

（昭和63年 教育学部養護学校教員養成課程卒）

総科ニュース

※この総科ニュースについての詳細は、徳島大学総合科学部総務係にお尋ねください。

徳島大学総合科学部総務係 TEL：088-656-7103 FAX：088-656-7298

E-mail：sksoumk@tokushima-u.ac.jp

【総合科学部の1年】

平成27年(2015)9月～28年(2016)8月

※平成27年9月3日(木)～5日(金)

インターユニ・フィールドワークの実施

総合科学部が参加する地域系大学・学部連携協議会との共催の下に、岐阜大学地域科学部が受け入れ大学になってインターユニ・フィールドワークプログラム in 郡上2015が開催されました。総合科学部からは豊田哲也教授、塚本章宏准教授と学生13名が参加しました。

※平成27年10月2日(木)・3日(金)

国立大学法人17大学人文系学部長会議への参加

信州大学人文学部主催により、第15回国立大学法人17大学人文系学部長会議が松本東急REIホテルで開催され、国立大学改革プラン等について意見交換されました。また、6月8日の文部科学省通知で言及された「人文社会科学系学部・大学院については組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換」に対して、同会議名で共同声明を发出することになり、総合科学部HPに掲載しました。

※平成27年10月21日(水) 優秀学生(3年次学生)表彰式

学部3年次の優秀学生13名を表彰いたしました。

※平成27年10月22日(木) 徳島大学びざん会の開催

徳島大学びざん会(同窓会連合会)が阿波観光ホテルで開催されました。

※平成27年10月23日(金) 徳島県知事講演会の開催

昨年度に続き、飯泉嘉門知事による特別講演会「地方創生の旗手・徳島～vs東京「とくしま回帰」総合戦略～」が、工学部共通講義棟6F創生学習スタジオで開催されました。講演後、学生と知事との活発な質疑も行われ、実りある講演会となりました。

※平成27年10月30日(金)

学部長と学部学生との懇談会を開催

学生19名、教職員10名が参加し、学生委員長の司会により、事前アンケートで寄せられた質問・意見を中心に、学生からの質疑に答える形で行われました。

※平成28年1月23日(土) 日中経済シンポジウムの開催

徳島日中友好協会(会長 葭森健介 総合科学部教授)主催によるシンポジウム「日中経済関係の展望－徳島と中国を結ぶ」が、総合科学部第1会議室で開催され、当学部の趙 彤 准教授もパネラーとして参加しました。

※平成27年1月28日(木) 康楽賞贈与式の挙行

徳島大学の優秀な専任教員および学生を対象とした公益財団法人康楽会による康楽賞の贈呈式が、長井記念ホール(蔵本キャンパス)で挙行されました。総合科学部の受賞者は次の方々です。

〔教員の部〕 山本 孝 准教授「X線分光法による個体触媒材料解析および評価手法の開発」

内藤 徹 教授「空間と持続可能な環境政策の理論的研究」

〔学生の部 学術〕 大学院総合科学教育部 博士後期課程3年次 峪口有香子
総合科学部 4年次 荒木のぞみ、松尾優美菜、斎藤勝平

〔学生の部 奨学金〕 大学院総合科学教育部 2年次 福永衣留
総合科学部 4年次 中島真希、角谷健太、濱地由衣

※平成28年2月22日(月)

教育部長と大学院学生との懇談会を開催

修了予定者5名、教職員8名が参加し、大学院教務・入試委員長の司会により、大学院生活、履修、修士論文、大学の設備などについての懇談が行われました。

※平成28年2月23日(火) 学長と学生との懇談会を開催

総合科学部からは学生3名と桑原 恵 副学部長が出席しました。

※平成28年3月3日(木) 台湾・嘉義大学長ら学長表敬訪問

総合科学部と部局間交流協定を締結している台湾・嘉義大学の邱義源学長一行が徳島大学の香川 征 学長を表敬訪問されました。

※平成28年3月4日(金)

総合科学部の30年を振り返る会の開催

総合科学部改組にあたり総合科学部の30年を振り返る会を、香川 征 徳島大学長ならびに理事出席のもとにホテルグランドパレスで行いました。渭水会からは、毛利久康理事長、大井美弥子 事務局長にご出席いただきました。

※平成28年3月7日(金)

福島支援活動紹介の特別展を開催

総合科学部の中山信太郎教授(放射線学)が中心となって進めている徳島大学による福島支援活動を紹介した第16回特別展「ふくしま とくしま とともに歩もう」が、徳島大学本部(新蔵地区)の日亜会館1Fのギャラリー新蔵で3月7日～平成27年4月28日に開催されました。

※平成28年3月23日(水) 平成26年度卒業式・修了式ならびに優秀学生表彰式の挙行

アスティとくしまで午前10時より挙行されました。午後には総合科学部において優秀学生表彰および大学院学位授与式が行われ、14時30分よりパークウエスタンホテルで謝恩会が開催されました。学部卒業生は254名、大学院修了者は博士前期課程の地域科学専攻28名、臨床心理学専攻9名、博士後期課程地域科学専攻が4名。優秀学生表彰者の4年生は次の通りです。

〔人間文化学科〕 佐原真美、入口成味、高橋麻純、橋本悠、谷 由里恵

〔社会創生学科〕 藤本琴美、荒木のぞみ、中谷真奈、松尾優美菜、濱地由衣

〔総合理数学科〕 角谷健太、榎本貴仁、林 俊輝

＊平成28年3月23日(水) 渭水会会長賞の授与

卒業式当日、12時40分より総合科学部第2会議室で、渭水会の石井 博会長より、第2回渭水会会長賞として表彰状と賞金が受賞者に渡されました。→関連記事 P18

＊平成28年3月25日(金)

永年勤続退職者表彰式・祝賀会の挙行

＊平成28年4月1日(金)

新・総合科学部ならびに大学院総合科学研究部の発足

徳島大学改組に伴い、常三島地区に生物資源産業学部ならびに理工学部が設置され、総合科学部も3学科(学生定員 265名)から1学科(社会総合学科/学生定員 170名)に改組されました。また、教員組織についても、大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部に代わり新たに大学院総合科学研究部が設置されました。大学院総合科学研究部は、新・総合科学部および教養教育院、全学のセンターの専任教員より構成されます。この他、大学院理工学研究部・生物資源産業学研究部も設置されました。

＊平成28年4月4日(月) 平成28年度辞令交付式の挙行

午前9時30分より、徳島大学本部で野地澄晴 新学長より辞令交付が行われました。

＊平成28年4月6日(水) 平成28年度入学式の挙行

午前10時より、アスティとくしまで平成27年度徳島大学入学式が挙行されました。同日午後には総合科学部で大学院オリエンテーションも行われました。入学者数は、総合科学部281名、大学院総合科学教育部博士前期課程35名、博士後期課程4名。

＊平成28年4月11日(月)

徳島大学学部設置・改組記念式典の挙行

生物資源産業学部の設置、理工学部の設置ならびに総合科学部の改組式典がホテルグランヴィアで行われました。

＊平成28年5月28日(土) 渭水会総会の開催

当日14時より総合科学部第1会議室で開催され、平成28年度の事業計画が承認されました。→関連記事 P44

＊平成28年6月17日(金) 平成28年度総合科学優秀賞受賞者表彰式の挙行

優れた研究成果を発表した総合科学部教員に対して贈られる総合科学優秀賞に樋口直人准教授が選出され、表彰式が行われました。研究テーマは、「在日コリアンに対する排外主義やヘイトスピーチといった社会現象に関する研究」です。

＊平成28年7月29日(金) 開南大学人文社会科学院(台湾)と部局間交流協定を締結

台湾・開南大学の趙 順文 人文社会学部長が総合科学部を訪問され、総合科学部と部局間交流協定を締結し、調印式が執り行われました。

＊平成28年8月9日(火) オープンキャンパスの開催

総合科学部(社会総合科学科)のオープンキャンパスが開催されました。参加者数(延べ数)は、高校生604名、保護者152名。

＊平成26年8月11日(木祝) 総合科学部振興会総会ならびに保護者懇談会の開催

在学生の保護者会である総合科学部振興会の評議員会・総会ならびに保護者懇談会(午後)が開催されました。参加者(延べ数)は延べ164名(実数66名)。

【人事異動】

＊評議員の紹介

総合科学部評議員に栗栖 聡 教授が選出されました。また、学長指名により、桑原 恵 教授(副学部長)も評議員に選出されました。任期はともに平成27年4月1日～29年3月31日までの2年間。

＊副学部長の紹介

教養教育院に異動となった宮崎隆義 副学部長に代わり、佐久間 亮 教授が新たに副学部長(社会連携・グローバル化担当)に選出されました。任期は平成28年4月1日～29年3月31日までの1年間。

＊コース長の紹介

総合科学部社会総合科学科の国際教養コース長に依岡隆児 教授、心身健康コース長に佐藤充宏 教授、公共政策コース長に水島多喜男 教授、地域創生コース長に平木美鶴 教授が選出されました。任期は平成28年4月1日～30年3月31日までの2年間。

＊名誉教授の就任

平成28年3月31日付で退職された次の教員が徳島大学名誉教授となりました。いずれも長きにわたって総合科学部などで教育研究活動に携わっていただきました。篤く御礼申し上げます。()内は徳島大学での在職年数。

伊藤正幸 教授(30年)、中山信太郎 教授(39年9ヶ月)

＊教職員の異動

平成27年10月1日付で、次の教員が教授に昇任されました。

坂田大輔 准教授(教育方法学)

平成28年3月31日付で、次の教職員が退職されました。

内藤 徹 教授(空間経済学)、中里見 博 准教授(憲法学)、福田スティーブ利久 准教授(英語教育学)、山下泰子 准教授(教育学)、山本裕史 准教授(環境化学)、櫻井信之 講師(物理学・量子科学実験)

平成28年3月31日付で、次の教職員が教養教育院に異動されました。

荒木秀夫 教授(健康行動学)、石川榮作 教授(ドイツ文学)、宮澤一人 教授(デスクトップミュージック)、宮崎隆義 教授(英文学)、大橋 眞 教授(生命環境学)

平成28年4月1日付で、次の教員が教授に昇任されました。

石田和之 准教授(財政学)、山口鉄生 准教授(健康教育学)

平成28年4月1日付で、次の事務職員が着任されました。

原 雄三 氏(総務科学部事務課長)、長谷川 稔 氏(総務係長)、新居秀幸 氏(学務係長)

＊新任教員の着任

平成27年10月1日付で、次の教員が総合科学部に新たに着任されました。

富塚昌輝 准教授(近現代日本文学)、山本哲也 特任講師(臨床心理学)

徳大ニュース

徳島大学に関するニュースをお届けします。詳細は徳大広報並びに本学ホームページを御覧ください。

また、会員の皆様の御意見や御要望をお寄せください。

徳島大学総務部総務課 TEL：088-656-7021 FAX：088-656-7012

E-mail：kohokakaricho@tokushima-u.ac.jp URL：http://www.tokushima-u.ac.jp

I 学内の状況

1 地域創生・国際交流会館完成記念式典を挙

平成27年9月24日、常三島キャンパスにおいて、徳島大学地域創生・国際交流会館の完成を祝い、完成記念式典及びフューチャーセンター・オープニングセレモニーを挙行了しました。

来賓を代表し、内閣府特命担当大臣の山口俊一氏が、「地方創生、活性化には、まさに地方大学は知の拠点として期待している。産学官のみならず金融機関も含めた組織が相集い、地方創生に資する働きをお願いしたい」と祝辞を述べられました。

2 「徳島大学、四国大学、四国大学短期大学部、徳島文理大学、徳島工業短期大学、阿南工業高等専門学校及び徳島県による徳島地区の雇用創出・若者定着についての連携・協力に関する協定」を締結

平成27年12月15日、協定締結式が行われ、本学の香川学長、四国大学・同短期大学部の松重学長、徳島文理大学の桐野学長、徳島工業短期大学の宮城学長、阿南工業高等専門学校の寺沢校長、徳島県の飯泉知事との間で協定書に署名がされ、事業目標の達成に向けた連携・協力を約束しました。

本プログラムでは、県内の高等教育機関や徳島県、地元企業など計35機関が事業協働体を組織し、徳島県において雇用創出と学生の就職率向上が見込まれる「次世代技術（LED・自動車・ロボット等）」、「地域医療・福祉」、「6次産業化」、「地域づくり・観光」の4分野における教育プログラム及び雇用の創出・開発に取り組み、学生の県内就職率10パーセント向上を目指します。

3 大村 智 北里大学特別荣誉教授ノーベル生理学・医学賞受賞記念 第9回共同利用・共同研究「酵素学研究拠点」シンポジウムを開催

平成28年3月7日、徳島大学疾患酵素学研究センターは、北里大学薬学部コンベンションホールにおいて、共同利用・共同研究を進めている北里大学北里生命科学研究所とともに、大村智北里大学特別荣誉教授ノーベル生理学・医学賞受賞を記念して、「酵素学から始まる新たな創薬研究」をテーマに第9回共同利用・共同研究「酵素学研究拠点」シンポジウムを開催しました。

シンポジウム終了後には、大村特別荣誉教授を交え

て意見交換会を開催し、「偉大な発見と研究成果は、学問の境界領域から生まれる。北里生命科学研究所と徳島大学酵素研との共同研究は、まさに天然物有機化学と酵素学の境界領域から新たな学問と社会に貢献する研究成果を生み出す大変意義ある取り組みであり、今後ますますの発展を期待したい」と大村特別荣誉教授のご挨拶を頂き、若手研究者を交えて有意義な交流の場となりました。

4 学部新設・改組及び新研究所等設置記念式典を挙

平成28年4月11日、徳島大学は平成28年4月の組織改革を記念する式典を徳島市内のホテルで挙行了しました。徳島大学の組織改革は、本学の強みである「生命系・理工系」をさらに伸ばすとともに、地方創生を牽引する人材を育成するため、全学的な学内資源の再配分により、「生物資源産業学部」の新設、「総合科学部」を社会科学系に特化した学部へ改組、工学部を「理工学部」へ改組、基幹教養教育を担う「教養教育院」の新設、さらに、特色である生命科学の研究機能を強化するため、4センターを総合した「先端酵素学研究所」を設置するもので、この再編により、本学は、常三島キャンパスに総合科学部、理工学部、生物資源産業学部の3学部、蔵本キャンパスに医学部、歯学部、薬学部の6学部体制となります。

II 学生関係

1 入学式

平成28年4月6日、アスティとくしまで平成28年度入学式を挙行し、合計1,909名（学部1,327名、大学院修士（博士前期）課程452名、大学院博士（博士後期）課程95名、3年次編入学35名）の入学が許可されました。

入学式では、入学生を代表し、薬学部の木村有希さんから「本学の教育方針に従って学則をまもり、学術の研究と人格の陶冶に努めることを誓います」と宣誓があり、引き続き、野地学長から「世界に眼を向けて、自身が世界のどのような問題に関与するのかを明確に示すMy Visionを持ち、それに向かって教育を受け、研究に取り組んでください」とのお祝いの言葉がありました。その後、在学生を代表して、歯学部の吉永 薫さんから「人と人との繋がりを大切に、臆することなく色々なことに挑戦してってください」と歓迎の言葉がありました。

徳島大学基金 古本募金のご案内

徳島大学古本募金は、徳島大学基金が運営するプロジェクトのひとつです。

徳島大学の在学生・卒業生・保護者の方、教職員や一般の方など当プロジェクトにご賛同いただける方々から、不要になった書籍等をご提供いただき、提携会社による買い取り額を寄附金として「徳島大学基金」に受け入れ、学生用図書や図書館活動の充実などに活用させていただきます。

■□■ 対象となる本 ■□■ ・ISBNが付いている本 ・書き込み等が少ない本 ※CDやDVDも可能です。

皆様の本が図書館の充実に役立てられます

[連絡先] 徳島大学附属図書館

TEL : 088-656-7584

E-mail : tssoumuc@tokushima-u.ac.jp

編・集・後・記

渭水会々報第45号をお届けします。ご寄稿くださいました皆様には厚く御礼申し上げます。今号も巻頭言として石井博会長と平井松午学部長のご挨拶を掲載いたしました。表紙は抽象画を描き続けている松川寛氏の作品で飾り、合わせて山村^{さんそん}の四季折々での自然^{うつつ}の移ろいと変遷を「原風景」と題して寄稿いただきました。また「総合科学部では今(27)」ではグローバル推進室の佐久間亮教授に多文化社会化について解説いただきました。Topicsとして第8回とくしま芸術文化賞を受賞した「くすのき しげのり」氏の業績と随筆を掲載いたしました。また特集として古くから親しまれている「村祭」の作曲者である南能衛^{よしえ}の足跡を紹介しました。次に「私の職場(3)」として和菓子店の茜庵について、また「進路通信」として石田基広就職委員長に解説していただきました。

「感動が人間を育てる」が完結編となり、石川榮作前学部長の似顔絵も惜しまれながら最終となりました。「研究最前線(4)」は社会学の視点で樋口直人准教授に執筆いただきました。そして井内孝幸元会長への追悼文を掲載しました。ご冥福をお祈りいたします。次いで渭水会会長賞の受賞者3名に「輝く新星(2)」を担当いただきました。「総科のおたから(四)」は江戸時代の徳島の繁栄を彷彿とさせる天井画について桑原恵教授に説明いただきました。次に中込潤氏に学芸員としての活躍について、新開英毅氏に算数のボランティア教室について、そして宇山孝人氏に阿波九城について投稿いただきました。Let's sportsは二つの記事で構成し、エッセイは3名、スタートラインは4名の方々に寄稿いただきました。(10月12日:J)

◆今年度、総合科学部は1学科4コースに生まれ変わり、再スタートしました。再スタート後も、キャンパスをゆく後輩たちの活気ある姿にかわりはなく、応援したい気持ちで一杯です。会報では、そんな後輩たちの活躍の様子も伝えていければと思っています。(U3)

◆事務局をおおせつかってから、あちこちで先輩達から「会報楽しみにしてます」「読みましたよ」と声をかけていただくようになりました。初対面の方でも会員さんだと分かると、会報の話題で話が弾むことも。事務局のお仕事を通じて、少しずつひとの輪が広がっていくことを、とてもありがたいと思う今日この頃です。

さて、渭水会の自主事業として、今年度は、くすのきしげのり先生の講演会を行います。毎月のように新刊が発行され、海外出版も多い、今をときめく作家さんです。話題が豊富で、また語り口も巧みなため、打合せでお話していて、つい時間を忘れて……ということも(反省…)。ぜひ、たくさんの会員の皆様にご来場いただき、いっしょに楽しんでいただきたいと思います。お申込お待ちしております!!! (ね)





ユーカリの花(総合科学部キャンパスにて)

渭 水 会 事 務 局

事務局は総合科学部1号館北棟1階入り口すぐ(部屋番号1N01)です。
業務時間および連絡方法は、以下の通りです。

時間／水曜日 13:30～17:00 (祝祭日および大学の休業日は除く)

TEL／088-656-7293 (月～金 10:00～17:00)

FAX／088-657-7467

E-mail info@isuikai.jp (メールアドレスが変わっております)

URL <http://www.isuikai.jp>